
* “ 愛してる ” の台詞 *

羽賀月美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

* “愛してる”の台詞*

【Nコード】

N8706V

【作者名】

羽賀月美

【あらすじ】

これは、私自身が体験した恋愛物語。実話です。

*

『いつき』は過去の恋愛がきっかけで、人を愛すること、人を信じることが恐くなってしまふ。
だかそこに1人の男子が現れて――

いつきはこれから人生最大の壁に立ち向かう。

激しく、そして切ない恋物語。

登場人物

・ 主人公『与瀬いつき（アタセ イツキ）』

・ 『稲山暎治』
イナヤマ エイジ

・ 『岡野荃夜』
オカノ トウヤ

・ 『佐原晃太』
サハラ コウタ

いつきの親友『落井ちか（オチイ チカ）』

1話：静かな幕開け（前書き）

こんにちは！

少し修正を加えました！

R18表現が入ってるので、苦手な方はご注意を。

でも、表現は柔らかめなので大丈夫かと……………（汗）

R18表現が含まれている話には『』がタイトルに着いています。

では、楽しんでみてください！

1話：静かな幕開け

暖かくさわやかな風が私の長い髪をなびかせる。
だが、今日から高校2年生になった私の目に、希望の光はない。

なぜか、人を好きになれなくなってしまった。
多分、今付き合っている彼氏の影響であろう。
つい最近まで、私を彼を愛していた。また、彼も私を愛した。

それはきつと、
彼を信じていたから…

だけど、その彼の、私を裏切るような行為は私から愛を消していく。
次第に彼と距離を置くようになり、喧嘩も毎日のように勃発した。

なにより、一番のショックは…

『ねえ、知ってる？百合ね、篠原にコクられたんだよ！』

噂に彼の名前があげられた。

私の知らない間に、他の女の子に…

私は絶望した。

もう、彼とは…さよならをしよう。

愛を失った私の中で、過去に戻ることは不可能になった。

しかし、ここからだっただ。

私の人生が変わったのは

*

「ああ、いつきクラス一緒だあ!!」
「ホントだあ! やったあ!」

仲の良い友達でハイタッチをして騒ぐ私。

——私は『与瀬いつき』

中学校のころはテストの成績が最下位だった私は、高校生になって勉強に励んだ。

そのためか…今私は、一番上のクラスにいる!——

でも、本当は……

ここのクラスにいるべきじゃない。

…これから、人生において初めて、こんなにも苦しんで、泣いて、傷ついた体で戦わなければいけないなんて……

それは、後に知るはめになった。

＊

『では、自己紹介しますかね。まあ、皆の前で自己紹介をするというのは恥ずかしいでしょうからね、じゃあ、血液型、血液型別で集まって自己紹介しましょう！』

ガタガタッ

一斉に皆が動きだす。

私の血液型はA B型。

さあて、どんな人が来るのかなあ？

「……………」

どんな人が来るのかなあ？

「……………」

どんな人が…

「……………」

ええっ！！！！！！

誰もいない！？

待てよ！心折れちゃうだろ？！

なんか痛い子になっちゃうだろ？！

てか、隠れてないでさっさと来いやあー！！！！

ホントはいるんだろ！？
いるんだろ！？

（あくまで）心の中で騒いでいると…

顔を下に向けた男子が私の前に現れた。

短髪で背の高い、スポーツをしているような体つき（後にバスケットとわかる）だ。

「えっと…あのうAB型ですか？」

初めて顔を合わせる人に対しての質問が微妙だったことをひどく後悔した。

その彼は、コクリとうなずいた。

「AB型って2人だけなんだね」

「そうだな」

必死に沈黙から逃げようとして焦る私。

「ああ、私『与瀬いつき』テンション高いけど、まあ気にしないでくださいな！」

とりあえず、ここは第一印象を大事に…

「おう、俺、『稲山』っていうから。よろしく」

ニコツと笑うと彼はその場を去っていった。

意外と話せた。

彼はシャイボーイなのか？

まあ、なにはともあれ自己紹介は無事に終了。

だが、その自己紹介は、私を残酷な扉へと誘うことに…。

そのとき初めて、私がA B型であることを後悔したのだった………

………

2話：感情の展開

「へえ、ここから意外と近いね」

「まあな」

週に一回の英会話の授業。進級して初めての授業ってこともあって、しばらくは自己紹介が続きそうです。

英会話の授業はクラスを半分に分けて授業をするために席の移動がとても面倒だ。

「部活なにやってるの？」「俺は野球部」

「ホントに？私も野球大好き！」

「マジか。そっちは？」

「私は演劇部だよ」

今話している彼は『佐原晃太』隣同士での自己紹介で彼とは簡単に打ち解けた。

「後でさあ、メアド交換しね？」

「うん。いいよ」

放課後…

佐原君とメアドを交換して私は部活へ急いだ。

*

ある日のこと…

私は昼休み、違うクラスの友達と昼食をすませ、お弁当箱を持って廊下を歩いていた。

『おい、どこにいんだよ!!』

なんだか、奥の教室が騒がしい。

「いつき、ちよつと見てみない？」

「えっ…う、うん」

気は進まなかったが、友達に手を引つ張られ、ざわざわとする教室をのぞいた。

「あ、あれ？」

「いつき…あの入っていつきと同じ演劇部の…」

間違いない。

彼は、私と同じ演劇部の『今井』だ。

そんな今井の周りには、ラグビー部、テニス部、サッカー部の男子等が囲んでいた。

『おい、『中西』はどこにいんだよ』

『与瀬さんと中西の関係について知りたいんだよね』

『中西』とは、今井と同じく演劇部のメンバーである。

てか、私と中西の関係って…。

確かに、私が一方的に片思いをしていたことはあった。けど、なんでこいつらが…。

「今井、なにがあつたのか教える。」

あの集団から、友達が今井を連れ出し、事情聴取をする。

それができる友達がとても素晴らしく見える。

「いや、まあ気にすんなよ。俺は大丈夫だから。」

「そうじゃなくて、どうしたんだって言ってんの」

「いや、中西と与瀬の交際についてせまられただけだ」

「でも、どうして…」

「与瀬、なにか心当たりあんじゃないのか。あの集団にそう思わせるようなこと。」

「交際…そうだ、最近篠原と別れた。」

「まあ、そんなことだろうな。あいつら、与瀬の浮気がどうたら、って」

「浮気！？私はそんなこと…つか、浮気したのはあっちじゃん。」

「まあ、だから、その彼氏さんの仕業だろ。とりあえず、この話は終わり。」「今井君…私のせいで、ごめんなさい…」

「大丈夫だって。じゃあ、また後で」

「いつき…」

「ひどいよ…別れた理由を私のせいにして、関係のない人まで巻き込んで…私、どうしたら。」

「でも、篠原とは縁切ったんでしょ？だったら関わる必要ないって。」

「うん…」

「大丈夫。なにかあれば相談しなよ。」

「ありがとう」

*

うう…。学校行きづらいよお…。

昨日、あの事件があつてから学校にいるなことが嫌になった。

ガラガラ…

ゆつくりと、その静まりかえった教室の扉を開ける。

「あーいつき、おはよう!!」

「杏、おはよう！昨日はありがとう。」

「気にすんな。」

そういえば、紹介が遅れました。

昨日、私を救ってくれた友達、彼女の名前は『杏』

1年生の時に仲良くなつて、それからずっと一緒にいる。
クールで強い。

言いたいことははっきり言う。

一緒にいるだけでもとても心強い友達だ。

「そうだいいつき、文化祭どうする？」

「文化祭？」

「あれだよ、ハルヒのコスプレで踊るんだよ！」

「ああ、でもメンバーいないじゃん。」

「今、ハルヒって言ったか？」

ある男子が反応した。

「うん。コスプレするんだよな！」

イエーイ！！

と私達は訳のわからないハイタッチをする。

「えっと…確か、『岡野』だっけ？岡野君もアニメ好き？」

「ん、好きだよ。小説も書いてる」

「へえ、すごい！将来は小説家ですかい？」

「わかんねえよ。」

そんなオタクトークで私と岡野は少しだけ仲良くなれた気がした。

それから、私は朝早く学校に行って岡野と話すようになった。

私は次第に岡野に惹かれていくのがわかった。

『私、岡野君のこと、好きになるかもしれない』

私の高校生活の中でこの恋が最後になる。

私はそんな気がした。

3話：荒れる舞台

チラッチラツと誰かの目線が気になる。

昔からそう、

誰かに見られるとそれが感じとれる。

私は視線を感じる方を向く。

バッチリと目が合う。

稲山と…

彼はコクリとうなずいた。それに私も応えるようにニコツと笑顔を
見せる。

そして、稲山は自分の携帯を出して、振ったり、指差したりする。
私はそれをメアドの交換のことだとわかった。

後でね、という意味を込めて私はコクリとうなずいた。

その夜…

私は風呂からあがると携帯が光っているのがわかった。

「誰からだろ…」

開いてみたところ、名前がなくて誰だかわからない。おそろおそろメールを見る。

《稲山です》

それだけが書かれていた。

あれ？私、まだ稲山君にメアド教えてないけど…

《佐原に聞いた》

ああ、なるほど。

私の許可なしに勝手に他人のメアド交換してたわけか。

まあ、いつか。

返信を適当に済ませ、私は眠りについた。

*

いつもの時間に私は学校の門をくぐった。

「岡野君おはよう！」

「よっす！」

だが、私は一瞬にして固まった。

岡野の近くに、稲山がいたから…

「うつつす」

小さく稲山にあいさつされる。

「お、おはよう…」

彼がこの時間にいることに驚いてうまい言葉が見つからなかった。

私は無言で自分の机にカバンを置く。

そこで私はピンときた。

そういえば、まだ岡野君のメアド持っていない。

岡野君から聞きにきてくれないかなあ…いや、ここは私から言った方がいいのか？

なんか、岡野君から聞きにくるってことはなさそうだし…

「ねえ、岡野君、メアド教えて？」

ダメって言われたらどうしょ…

そんな思いがだんだん私を不安にさせる。

「ん、いいよ？」

だが、あっさりとOKされ、（あくまで）心の中で極限のガッツポーズをした。

「はあゝ授業疲れるう」

ふっと時計を見る。

まだ2時限目が終わったばかりである。

動く気力もなくてぼーっと座っていると。

スッ

ん？

今私の筆箱からなにかさらわれた気がしましたけどぉー！！

視線を上へあげた。

どうせ、友達の仕業だろ。そう思って私は、視線を上へあげた。

「稲山君…」

予想外の出来事に言葉を失う。

今、私の筆箱の中にあったペンを持って笑っている稲山がいるから…

「ちょ…返せし。地味なイタズラだなあ」

苦笑いになってしまった。

すると、稲山もニコツと笑って…

「泣いたら返してあげる」

……えっ？

い、今泣いたら返すって…おいおい何言ってるんだよ、こいつはよお！
変態？まさか変態！？

でも…何て言ったって私は演劇部！！

泣き真似くらい出来なくてどうする……！！！！

「うわあああん！」

精一杯の泣き真似をしたら、彼は１人大笑いしていた。

「やっぱあんた面白いよ。はいっ」

そう言って私の手にペンを置いた。

私の顔が熱くなるのがわかる。

泣き真似をした恥ずかしさもあつたんだろうけど…

なにより、

今日の稲山の笑顔が輝いてみえたのだった。

*

学校の帰り道、私は岡野にメールを送ろうか迷っていた。

なぜなら…

私はこれから、岡野君をカラオケに誘おうとしてるからです！

「うーん…まずは、あの人がカラオケに行くかが問題だな。さりげなく、カラオケの話題を送ろう」

私はカラオケに行くのかを聞いた。

《んゝまあ、行くよ。そこまで頻繁には行かないけどな》

私は思う。

やっぱり、小説を書いてるだけあって、メール画面からだけで岡野君の表情がわかる。

「いけない。今は感心してる場合じゃない…」

そうだ。

これは、岡野君と一緒にカラオケへ行けるかの勝負なんだから！！

「よかつたら、一緒にカラオケ行きませんか？」

ここだ！という時に、私は岡野君をカラオケに誘ってみた。

チカチカ

携帯の光が点滅する。

「岡野君からだ！返信早っ！！」

おそろおそろメールの内容を確認する。

《いいよ》

ん？

こんなあつさりでいいの？マヂで？マヂっすか？

じわじわと来る喜び。

なぜかドキドキする胸。

張り裂けてしまいそうだった。

だが…

これでいいのか…

私はあの事件を思い出す。

もし、岡野君と遊びに行くとして、それを、ラグビー部やサッカー部になんか見られたら？

私の浮気の噂は否定できなくなる上に、次のターゲットはきっと岡野君に来る。

そしたら、きつと…岡野君は私から離れてしまう。

その恐怖が私を襲う。

だが、私の良心が動きだす。

このまま嘘を突き通したり、隠し事なんかできない…

一緒に遊びに行く前に、やっぱりこのことは言っておこう。

岡野が私から離れていく恐怖を感じながら、長い長い文を書いてい

く。

チ力チ力

やっぱりこの人返信早い…。

ゆっくりと携帯を開く。

《俺は別に大丈夫。そういう奴らには慣れてるしさ。だから、安心しな?》

感動で身体が震えた。

やっぱりこの人は、いい人だ…。

だが、このまま2人で一緒に過ごせばよかったものを、私の気の迷いから、余計なことを彼に送ってしまった。

《佐原君とか誘わない? 後、稲山君も。》

結局、4人で遊ぶことになってしまった。

でも、なぜか私の心はウキウキしていた。

夏休みが楽しみだ。

夏休みまで後1ヶ月

4話：新しい恋の始まり

相変わらず、稲山のイタズラは止まらない。

スッ。

稲山は私の筆箱から定規を取り出して微笑んでいる。

「こら、返さないと怒るよ？」

「はいはい」

彼は笑いながら定規を机の上に置いた。

「今日の夜、メールするから。」

稲山はボソツと付け加えてその場を去っていった。

「はい、今日は一班が美術室の掃除当番ね。」

うわぁー私一班じゃん…

誰か他に知り合いいるかなあ…

私は《掃除当番》と書かれた紙の一班の欄から、メンバーを読み上げる。

女子には残念ながら知り合いはいない。

…岡野君、一緒にならないかなあ…。

男子の欄から岡野君の名前を探す。

岡野君……………

…あつた!!

一班の欄に、岡野君の名前がある。

（今日だけは）よっしゃあ！と教室の端っことでガッツポーズをして叫ぶ。

「与瀬、行くぞ」

私の肩にポンツと手を置き、その低い囁き声がさらに私を興奮させる。

「掃除当番、一緒だね！岡野……—」

その囁き声の正体が岡野だと思い込み、私はとびきりの笑顔で振り

向いた。

だが、そこに立っているのは……………

「稲山君……………」

「俺、岡野と与瀬と一緒にだよ」

この人に関してはホントに予想外なことが多い。

「行こうぜ？」

稲山に背中を押され、私はしぶしぶ美術室へ移動した。

「はあ、やっと終わったよ」

「無駄に広いだよな。この教室は」

掃除を終え、岡野と稲山と私の3人で廊下で話している。

「さあて、俺は部活行こつかな」

「俺も」

2人は同時に部活靴を持つ。

「私もこれから部活だ」

私は伸びをして、2人に笑顔を向ける。

「ん、頑張つてね。じゃ、お疲れ！」

岡野は手を振ってさっさと体育館へ行ってしまう。

「稲山君もお疲れ。部活頑張つてね。」

「おう、与瀬もな」

そう言つて稲山は私の頭に手を置いた。
不思議と嫌ではなかった。

なんだか、懐かしくて、温かくて、私はニコツと笑つて稲山を見つめた。

「じゃ、またメールする」

そう言つて稲山は岡野君の後を追いつけるように、その場から去つていった。

その稲山の後ろ姿を見て、私は少しだけ胸が痛んだ。

＊

チカチカチカチカ

夜の9時。

予告通り、稲山からメールが来る。

《4人で遊びに行く予定決まった？》

そんな内容のメールだった。

正直言つて、まだ決まってるない。

岡野君はバレーボール部でバスケットボール部とバレーボール部は体育館を交互に使つたため、なかなか予定が合わない。

そんなことを彼に送った。

《そつか。また詳しいことわかったらメールして。》

その返信に対して、私は《了解》と画面に文字を打った。

送信ボタンに指を置いて…

私は押すのをやめた。

編集ボタンを押して《了解》の文の下に文を追加する。

《今度、2人で会いませんか？》

今度は躊躇うことなく送信ボタンを押した。

《うん、いいよ》

なぜだかは知らないが、
もうこの時点で私の頭の中から……………

岡野君が消えていた。

5話：戸惑い

「はあゝ…結局4人で遊びに行けなくなっちゃったなあゝ…残念…」

結局、4人の予定が合わず、夏休みは遊びに行くことをやめた。

「ああゝ！遊びに行く人がなくてつまんない！」

そう言ってベッドに倒れてハッとなった。

「そうだ、稲山君と遊びに行けるじゃん」

あのメールの後、お互いに空いてる日を送り、遊びに行く予定をたてた。

ちょっと遠出をして、大きなショッピングモールで買い物をすることにした。

「男の子と2人で出かけるなんて、久しぶりだなあ」

ふいに、

このまま付き合ったりしたら…――

全部を妄想する前に、自分で強制終了した。

「な、なに言っちゃってんだ私…」

私は顔をペシペシと叩いた。

このとき

私の思いは、完全に稲山に向いていることに自分でも全く気付いていなかった。

いや、今思えば、

私はこの思いに、
気付きたくなかったのかもしれない。

*

「おはよう!」

「よっす!」

私はいつものように岡野君とお話しをする。

「次はいつ会えるかねえ?」

「さあな、なかなか予定が合わないからな」

「残念…」

「また予定が合う日を探してみるよ」

「そうだね」

夏休みまで後少し！！！！

*

夏休みだぁーーーー！！！！

まあ、月日が経つのはとても早いもので、あっという間にサマーバケーションですよ！！

そんな夏休みのある日の部活の時…

「与瀬、与瀬！！与瀬は今度花火大会行くの？」

友達からそんな話題がふられる。

「花火大会？この近くなの？」

「そうそう、確か8月だったかな？」

「…ねえ、それってさあ、夜だね？」

「はあ？当たり前じゃん！私は友達と行くんだ」

今の質問は決してわざとボケたわけじゃない。

私は急いでポケットから携帯を開いて岡野、佐原、稲山にその日の予定を聞き出すために一斉送信した。

「なにになに？そんなに慌てちゃって」

「いや、3人にその日の予定聞こうと思って…」

「4人仲良いもんね。男3人きつくくないの？」

「まあ…もう相談したりされたりの関係だし。私はあの3人結構信頼してる」

「はあ…リア充してんな…。」

リア充とは…

リアル―現実―が充実、つまり、恋や友情関係が上手
くいってる人のこと を言う。

まあ、響き悪いから私はあまり好きな言葉じゃない。

まあ、そんなことは置いといて…

「とにかく、まずは3人の予定を聞かないとな」

「頑張れ与瀬！」

なにに対しての”頑張れ”なのかは知らないが、私はとりあえず”うん”とだけは返しておいた。

*

「お！メールきたぞ」

堂々の第1着は…

やっぱり返信の早い岡野だった。

《俺行けるぜ、つか寧ろ行こうぜ》

はあ、良かったあ…

とりあえずまずは、岡野君OK…っと…。

チ力チ力

ん？次は誰だ？

私はメール画面を開く。

「佐原君からだ。佐原君もOKか。よかった。」

後は稲山君だけだ。

チ力チ力…

またも返信が夜の9時にきた。

「部活忙しいのかな」

しょうがないか、という感じで携帯を開く。

《夜なら大丈夫です》

やっぱり、私の勘は間違っていなかった。

部活終わった後ならきつと空いているだろうと思っていたからだ。

3人で予定をたてて、ようやく、念願の、4人で遊びに行くことが決定した。

「はあ、花火大会が楽しみだ！」

私は衣装ダンスから花火大会に着ていく服選びを開始した。

チカチカ

ん？またメール？

サブディスプレイに光る彼の名前…

稲山からだ。

《夏休みの宿題ってなんだっけ？》

今聞くことなのか…？

いろいろ突っ込みたいところはあつたが、…まあ、ここは親切に、この与瀬さんが教えてやろうじゃないの！！！！

そういつて、終業式に配られた学級通信を手にとる。

実は私も記憶が曖昧でした…あはは…。

学級通信に書いてあることをそのまま稲山に送った。

チカチカ…

おっ、返信きた。

躊躇することなく私はメール画面を開いた。

《サンキュー、好きだぜ、与瀬！》

全く、本当におふざけが好きなんだからあ。

私もふざけて、

《私も、好きだよ！》

しばらくして返ってきた返信…

《いや、これ、マチなんだけどなあ》

もう、おふざけはいい加減おしまいになさいよ。

あんたのおふざけは見え見えなんだよ〜だ。

《冗談やめてくださいよ先輩、怒りますよ?》

わざと後輩口調で言ってみた。

《後輩、それがマチなんだよなあ》

あっちもノってくれた。

《そんな、ふざけた告白があるか!》

なんか、楽しくなってきたぞぉ〜!

だが、そんな楽しみもすぐに消されてしまう。

《いや…しみりした告白は嫌かなあって思って…。でもこれは本
気だ!俺が与瀬を幸せにしたい。俺、与瀬となら結婚したっていい。
お前を離したりしないから…》

私の胸が張り裂けそうなくらいドキドキしてる。

——ここでやっと気付いたんだ。

私は…この人が、稲山君が好きなんだと…——

涙が出そうなくらい嬉しかった。

私の過去や辛い経験が頭の中で走馬灯のように流れる。

嬉しさのあまり、ついに一粒の涙が頬を伝う。

その一粒の涙が落ちた時、私は…——

——《ごめん》とだけ書いて送信ボタンを押した——

6話：フェイドアウト

「うーん…」

気が付けば、もう辺りは明るくなっていた。

「朝の…9時？」

あのメールをした後、あのまま眠ってしまったらしい。

私は眠い目をこすって目の前の携帯に手をのばす。

《メール一件》

多分稲山君だろう。

昨日は私が返信したあと眠ってしまったんだ。

だから、私が寝てる間に次の返信が来たんだろう。

だが、いざ携帯を開いてみれば、受信時間はAM8:30
ついさっき来たメールだ。

慌ててメール画面を開く。

《与瀬、俺と付き合ってくれ》

稲山からのメール

《ごめんね、今はそういう気分じゃないの。》

《カレカノ関係は嫌か？》

嫌…じゃない。

この人と付き合えたら、って思うと今にも泣き出しそうなくらい嬉しい。

でもね、

過去は消えないんだよ。

この私の気持ちは誰にもわからない。
私は、人を愛してはいけない。

《私は変わらないんだ。でも、いつかは変わってしまうんだよ》

多分、このメールの意味を解読できるのは…自分の過去を知っている人―私―だけである。

《なにか、1人でかかえてることがあるんじゃないのか？》

だが、さすが…といっていいのだろうか。

私が予想していた返信とは全く異なったものが返ってきた。

《別に…稲山君には関係ないし、この気持ちは誰にもわかんないよ》
私もなんでわざと相手が気になってしまうようなじれったい内容を
書いてしまうのだろう。

でも、本当は誰かに私のことを誰かに知ってもらいたくて、S O S
信号をだしたのかもしれない。

ヴーヴーヴーヴー

いきなり携帯のバイブ音が私の手の中で響いた。

「電話？」

誰の番号だかは知らないが私はおそろおそろ電話に出る。

「もしもし…」

『話してくれない？』

低く、小さな声。

私は大きく息を吐いた。

私は、変わってしまうことが恐かったんだ。

元彼の『篠原』とは11ヶ月も続き、周りからは、将来、結婚しそうなカップルとしても有名だった。

篠原からのアプローチで、私は次第に彼に惹かれていき、やがて彼を愛すようになった。

こんな日が続けば…

だが私のそんな願望はすぐに消される。

私のトラウマは、その彼によってこじ開けられる。

それは、小学6年生のこと…

私は学校の帰り道を1人で歩いていた。

…さつきから誰かが私の後を追ってくる。

そんな恐怖が私を襲う。

私が走れば後ろの影も私の歩調に合わせて後を追ってくる。

怖い…怖い…怖いよ…

当時、足には自信があった私は、普段の授業では出さないほどの全速力で走った。

家まではまだ遠くて、長距離が苦手な私は家までは保たないだろうと確信し、かなり距離を離して知らない建物の影に身を潜めた。

10分くらい経っただろうか…

私はおそるおそる辺りを見回した。

しん、と静まりかえっていて誰かがいる気配がなくなった。

ふっ、と安心の息を吐いて私は建物の影から出る。

そして、私は一歩前進した。

『足、早いね』

ゾクッと体が震えた。

私は急いで逃げようとした。

だが、男性との距離は近かったために、すぐに抱き抱えられた。

「いやっ——」

私が叫ぶ前に、男は私の口を塞ぐ。

「ん、んっ——!!」

助けが呼べず、私は涙がでた。

死ぬかもしれない、そんな最悪のビジョンが私の頭の中を駆け巡った。

誰か、助けて……………

私の意識がぐらつき始めたとき、男は無理矢理私の足を広げ、スカートの中に手をいれる。

待って、いや、私…この人に犯される……

まだ小学6年とはいえ、もうすぐ中学生になる。

強姦…

この言葉の意味は理解していた。

「んっーんっー!」

必死になって足掻く。

だが、さすがに男の力にはかなわない。

ついに、私のナカに男の手が挿入される。

「んっ!」

体が仰け反るような痛み。

私はその手を振り払おうとして足をバタバタさせた。

男の吐息が私の顔にかかる。

タバコのおい、そしてお酒のおい…

ようやく男の力が抜けて、私はその隙を見て男を突き飛ばして走って逃げた。

もう、それから、男は追って来なくなり、家に着いた私は部屋で泣きながらうつづくまった。

今でも、そのにおいははっきりと覚えている。

だから、タバコやお酒のにおいがすると、あの時の光景がフラッシュバックして、私を恐怖へと導く。

その事は、篠原にも話してあるので知っていたはずなのだ。

だが、篠原は変わってしまった。

篠原の友達の影響なのか、彼は頭を茶色に染めた。

おかしいと思いながらも、ある日、私は篠原の家に行った。

すると、そこには、

大量の吸殻がつまれた、灰皿があった。

そして、

あの時嗅いだにおいも部屋に充滿していて、私の体は小刻みに震えた。

「どついつと?」

「ああ、えつと、ただ友達が吸ってただけで…」

「信じらんない…」

「いつき…」

「それに、まだ隠してることもあるんじゃないの？最近素っ気なくなつてさあ、メールの返信もろくにしてくれないし、それを私が言っても一向に直してくれない！……今のあなたを、私は好きにはなれない」

「待てよ、いつき」

「いやだ、私は、そのままの変わらないあなたが好きだった。もうさあ……終わりにしよ」

「なに言ってるんだよ」

「ごめん、私、好きな人いるから…」

私は最終手段を使って彼を引き離した。
好きな人いるっていうのは嘘。

「…そうかよ。じゃあな」

彼の後ろ姿を見て、私はたくさんの涙をこぼした。

…篠原…私が好きな人がいるって聞いて、どう思っただろう……

今になって後悔と罪悪感が生まれる。

………きっと、今井のリンチ事件も、それがきっかけで私の好きな人を探していたのだろう。

でも、彼がそんなことするなんて…

私もあんなこと言っただけで悪いと思ってる。

もし、彼がこのまま諦めずに私にぶつかってきたならば、私はまたあなたを好きになって、私もあの言葉を撤回させたかった。

だが、彼にとってはこの程度の愛だったんだ、と思うと同時に、恋をして変わっていく自分を見たくないと思うようになり、

私は人を信頼することをやめた。

1時間ほどかかって、私の過去や気持ちを全て稲山に吐き出した。

もう過去のこと…

誰かにバラされようが知ったこっちゃない。

稲山は、私の話しを無言で聞いていた。
そして、稲山からでてきた一言…

『辛かったな…』

なぜだかは知らないが、稲山のこの言葉を聞いたただけなのに、大粒の涙が頬を伝う。

『全部1人でかかえてたんだな…なあ、俺がそばにいたら、ダメかな？』

「ダメだよ、私は不幸を呼ぶ女なの。稲山君がそばにいてくれたところで、私は稲山君のこと幸せにしてあげられない」

『そんなことねえよ』

「私、稲山君も岡野君も佐原君も、皆好きだし、大切だって思ってる。でもね、このままがいいんだよ。変わってっちゃうのが嫌なの…。」

『与瀬…』

「なに…？」

『俺がお前を幸せにする。過去のことなんか、俺が忘れさせてやるって。変わらず接して大切にすることから…』

「…ありがとう、でも…」 『とりあえず、今日はゆっくり休め。疲れただろ？』 「…うん」

『じゃあ、もう切るわ。またなにかあったら連絡しろ。1人で抱えこむな、わかったか？』
「うんっ。」

『よし、じゃあな』
「じゃあね」

ブツッ プープープープー

ようやく電話を終えた私は、今まで感じたことない幸福感に満ち、
なにかたまっていたものがスツと抜けていくようだった。

「少しだけ…この人のこと、信じてみようかな…」

少しずつではあるが、稲山が私の中で大きな存在になっていった。

7話：幸福

結局、あのメールの後も、1週間ほど稲山からのアプローチは続いた。

だが、私はなかなか前には進めず、いい答えを返すことは出来なかった。

むしろ、きつぱりと断ればいいものを、迷いからか曖昧な返事ばかり送って稲山の気をひこうとしている自分がいる。

私って汚なくて、最低な女だ…

ちゃんとそれは自覚していた。

だって、私は稲山のことが好きで、稲山も私のことを好いてくれる。

友達以上になれなくても、その関係は保っていきたいし、何より、稲山を離したくない。

「だから…もうちょっと待ってて。私も、なるべく早く、あなたのそばに行くから…」

携帯電話をぎゅっと握り締めてつぶやく。

チカチカ…

そうしていると、突然携帯が点滅した。

「また稲山君かなあ？」

私は携帯を開く。

ディスプレイに表示された……佐原の名前。

《明日の花火大会さあ、一緒行かない？》

待ち合わせのメールだった。

《うん、いいよ。じゃあ、5時に〇〇駅に待ち合わせはどう？》

特に問題はないので、快く賛成した。

「そういえば、花火大会明日じゃん」

花火大会より、稲山君と2人つきりで出かけることが楽しみですっかり忘れていた。

しかし、明日の花火大会も楽しみである私だった。

*

「いつてきまーす！」

『はい、気を付けて行ってきてね。あまり夜遅くならないようにね』

普段、こんなに遅くまで遊ぶことはない。

だが、男子が3人いるということで母も、「それなら安心だね」と躊躇うことなく私を玄関で見送った。

待ち合わせの駅に到着。

だが、まだその場所には佐原君の姿はなく、腕時計を確認すると、予定より5分ほど来てしまった。

『よっ』

やがて、時間ぴったりにきた佐原。

Tシャツに下は七分丈のジーパンという、なんともシンプルな格好だった。

岡野は、花火大会が行われる会場の近くに住んでいるため、自転車で、稲山は、まだ部活が終わってないようなので、後から合流することのこと。

佐原と2人つきりでの移動。

この駅には私たちと同じ学校に通っている生徒、知り合いも多い。

表面上は冷静だったが、その姿を誰かに見られて、まためんどくさい誤解が生まれるんじゃないかと心の中では不安を感じていた。

「さあて、どこで見る？」

もうすでにたくさんの人でにぎわう会場。

こんな状態で、果たして座って花火を見れるだろうか。

「あっちなんかどう？」

佐原が指指した先に、原っぱみたいな場所があり、そこには同じ花火大会を見にきた観客の姿がある。

とりあえず、空いているところにさっさと座っちゃった方がいつか。

そう思って私と佐原はその原っぱに腰をかけた。

何分経っても、岡野と稲山がくる気配がない。

なんだか、無言で2人つきり、長い時間いるのは、さすがに心が折れそうだったので、私は「ラムネ買ってきてあげる」と行ってバッグを持って佐原を1人残した。

「2人とも来てるかな…」

たくさんの屋台がでている中で、私はなるべく遠いところでラムネを2本買い、時間を稼いだ。

だが、戻ってみれば、まだ誰もいない。

「はい」

「おう、サンキュー」

仕方がなく、私は佐原の隣に腰をかけた。

別に佐原が嫌いな訳じゃない。

付き合ってもいないのに異性と2人つきりしているのは誰でも緊張するだろう。

今まさにそんな感じだ。

「岡野もうすぐ来るって。」

ラムネを飲みながら佐原は言った。

「じゃあ、迎えにいつてくるよ」

私はそういつて携帯を持って立ち上がる。

「いいよ。俺が連絡いれてここに来させるから」

「そ、そう…?」

少々不安はあったが岡野のことは佐原に任せることにした。

「あ、電話」

佐原はバイブで震える携帯を取り出し、その電話に出る。

「あ、岡野か」

どうやら岡野らしい。

「今どこ?...うん、ん、今俺たち真っ直ぐ行って左に曲がった原っぱのところ。...うん、うん、わかった、了解」

ピッ

あっさりと連絡をしてさっさと携帯をしまう佐原。

ここは結構複雑な場所にある。

果たして岡野君は今の佐原君の説明でこの場所が理解できたのだろうか。

私だったら到底理解できない、いや、する気もない。

『よっ！』

予想より早く岡野君が来て私は驚いた。

あの説明だけでこれだけ早く現地に辿り着けるなんて…ある意味この人はすごい。

「もうすぐで花火大会始まるね！」

気が付けば、もう辺りは暗くなっていて、さっきまでは人が少なかったこの原っぱも観客でいっぱいに埋まった。

「あれ？稲山から電話来てた」

たまたま携帯を確認した岡野君は稲山君の着信に気付いた。

「あ、俺もだ」

佐原君も同様…

「じゃあ、私も？」

念のため、私も携帯を取り出して確認する。
だが、私の着信履歴はゼロ。

「道に迷ってんのかな」

そう言いながら岡野は稲山に連絡を試みる。

が、しかし…

「あいつ出ねえわ」

「俺も電話してみる」

佐原も稲山に連絡をいれてみる。

「ダメだ、あいつ出ねえ」

「あれ？いつのまにか俺の携帯に連絡入ってる！」

なにしてんだか…

お互い行き違いが発生し、なかなか稲山との連絡が取れない。

ブーブーブーブー

「ん？」

いきなり私の電話が鳴った。

「あ、稲山君だ」

私はあわてて電話にでる。

「もしもし？なんか電話に出れなくてごめんよ」

『ああ、大丈夫。それより、もう近くにいらっしゃるんだけど今どこ？』
「結構複雑なところにあるから迎えに行くよ」

ドオーーーーーーン

いきなりの大きな音に私は驚いた。

『おお！始まったな』

私は空を見上げた。

大きくてキラキラした花火。
自然に私の目も輝く。

『とりあえず、今どこにいるか教えてくんね？』

「あつ、今迎えに行く。だから、ちょっと待ってて。」

『おう』

私は携帯を閉めて立ち上がる。

「どうした？」

岡野が声をかける。

「稲山君が近くにいらっしゃるって。だから、迎えにいつてくるよ」
『なら、俺が行くよ。女の子1人で行かせるのもなんだし、俺の方が早いし』

そっいつて岡野君は笑ってみせた。

相変わらずこの人は、人を思いやる心ができてる人だ。なんてジェントルマンなんだ。

「じゃ、ちよっくらいってくるよ」

そういつて岡野君は走り去る。

再び2人つきりになった私たちのなかで会話はほとんどなかった。

「ヤバい、すごくきれい！」

「おい、稲山、うまく写真撮れよ」

「じゃあ、佐原、俺とどっちがきれいに写真撮れるか勝負な」

ようやく到着した稲山のテンションはすでに上がっている。

「2人ともお、せっかくの花火なんだから、少しはちゃんと見れば？」

いっぱい笑って、いっぱいおしゃべりして、私にとってこの花火大

会が一番の思い出になったんだ。

「あー楽しかった!」

「与瀬、今日はサンキューな」

「うっん、たまたま花火大会のことを聞いてね。これだ! って思ったんだ。」

そんな雑談をしている私たちは、今、あるトラブルで帰れない状態にあった。

「それにしても、混んでるね。…駅。」

「まあ、あれだけの人間がいつぺんに動くからな」

たくさんの人が駅を塞ぎ、これでは1時間くらいは身動きが取れないだろう。

「とりあえず、空くまではここで待機だな」

だが、話しに夢中になって家に帰るのがかなり遅くなったのは、言

うまでもない…。

「ここまで着いてきてくれてありがとう。」

「いや、俺この電車で一本だし。それより、ホントに1人で帰れる？」

「うん。大丈夫。稲山君、家遠いんだから早く帰りな？」

「おう、気を付けて帰れよ」

「うんっ。じゃあ、私はここで。また…明後日だね」「そうだな。楽しみにしてるからな」

「うん、私も。じゃあね!!」

電車の扉がしまり、彼が遠ざかっていく。

彼が乗っている電車を見送ったあと、私は真っ直ぐ家に帰った。

8 話：舞台袖の光景

稲山君との2人っきりのお出かけ。

私はこの日のために、服を少し女っぽくした。
だが、まだ付き合ってもいないのに、彼女と誤解されてはマズいの
で、少し控えめに、といった感じだ。

私は、待ち合わせの駅に向かう。

だが、まだ待ち合わせ場所に彼の姿はない。

「5分早かったか」

いつも、待ち合わせには早く着いてしまう。
まあ、だからといって悪いということはないが…

『与瀬』

誰かに呼ばれた。

顔を上げると、これまた七分丈のジーンパンにポロシャツといったシ
ンプルな格好できた稲山の姿があった。

「ほら、行くよ？」

ボツーとしている私を起こし、私の前を歩いていった。

ちょうど、電車が来て、私たちはそれに乗った。

稲山は、1つの椅子の端っこに座り、自分の隣の席をトントンと叩き、「座りなよ」と言った。

なぜだか知らないが、その優しさにふいにドキッとしてしまった。

「うっん、私、立ってていいかな？」

そのせいでテンパリ、稲山の隣に座れなくなってしまった。

「疲れない？」

「うん、平気」

ホントは正直疲れた。

電車に揺られること30分。

ようやく、目的地に着いた私は、稲山より先に降りて辺りを見回した。

建物の少ない土地が広がり、私が住んでいるところよりはるかに綺麗だ。

その中にそびえ立つ、見たこともないような建物。

端から端まで1キロあるのではないか、という大きさ。

「すごい！こんなでっかいお店初めて！」

「中もすごいよ。たくさんお店あるし。1日じゃとても周りきれないね」

「そっだね。」

「でも、楽しみ！」

「さて、入るか」

そうはいって入ったものの、お店がいっぱいありすぎて逆にお店の中に入れない。

「なんか、見たいのある？」

「お店いっぱいありすぎてわからない。なにか遊べるようなところとかない？」「なら、この近くにゲーセンがあるよ。行く？」

「うん！行く！！」

そうして、結局私はゲーセンに行くことになったのだ。

「あ、俺これやってこ」

稲山が見つけたのは、

バスケットボールのシューティングゲームだ。

確かに、稲山はバスケットだし、彼が好きそうなゲームだ。

稲山はお金を機械に入れる。

バスケットをする稲山を見るのは、これが初めてか…

ふいにそんなことを思った。

腕につく筋肉、筋、血管までもがはつきりと浮き出っていて、またも、

ドキッとしてしまい、目をそらす。

ゴールを狙う彼の真剣な表情。

バスケットを愛す彼の気持ちがあるものすごく伝わってくる。すごく楽しそうで、時折、私を気にしてくれる。

なんだか、とても懐かしくて、前にもこんなような幸せな気分になったような気がする。

こんなにも近いのに、彼がまだ遠くにいるような感じが、私の胸を苦しめる。

「よっしゃ、ハイスコア」

彼の満面の笑みを見て、私も自然に笑顔がこぼれた。

「さあて、腹減ったな。どっかでお昼にするか」

「うん。賛成」

私の手は、自然と彼のところへ伸び、彼に気付かれないようにキュッと鞆の端っこを握った。

それから、私たちはお互いの隣に座り、おしゃべりをしていた。

「与瀬さあ、他に隠してることもあるんじゃないのか？」

なにを言いだすかと思えば、いきなりそんなことを私に尋ねてきた。

「なんで？」

「いや…聞いていいのかわかんないけど…。前から思ってたんだけど、腕の傷の跡が気になって…」

「あつ…」

ハッとなって私は左腕を隠す。

「これは…過去にやったりリストカットだよ。もちろん、今はやってないけど」

そう。

言いたくはなかったが、このリストカットは中学時代から続いていて、自分の気持ちにコントロールがきかなくなると、無意識のうちにカッターを握っていた。

いわゆる、依存性である。

その話を初めて聞いた稲山の表情は、意外と冷静だった。

今の話しで、きっと引いたかもしれない。
嫌いになってしまったかもしれない。

そんな恐怖が頭をよぎった。

しかし、彼は違った。

「ちゃんと相談しろよ。俺が聞いてやるから……」

静かにつぶやき、私の頭をなでた。

稲山君……………

大好きだよ……………

＊

楽しかった1日。
時間はあっというまにすぎてしまい、私と稲山はショッピングモ
ールを出た。

稲山は、この電車の1つ目の駅が最寄り駅で、すぐにバイバイをす
るのかと思うと、ちょっと寂しくなった。

「家まで送るよ」

だが、こういわれた時は驚いた。
私はあわてて断る。

「送りたいんだよ。与瀬を」

せっかく最寄り駅が近いのに、わざわざ電車の乗り換えをして、そ
の上、その来た道に戻ってまで私を送ってほしくなかった。
だから、私は「途中まででいいよ」と言っ、その後は稲山の背中
を押すように帰らせた。

稲山君のことは好き…

でも、もしここで稲山に近づけば、同じあやまちをおかすかもしれ
ない。

だって、稲山のその心遣いや後ろ姿が………

私の愛していた人に、
似ていたから。

9 話：スポットライト

2人っきりのお出かけの日から、1日が経ち、相変わらず稲山との連絡は続いていた。

《俺、与瀬となら結婚してもかまわない。俺が与瀬を幸せにしたいんだ。》

果たして、その言葉がいつまで続くのか。そういつときながら、結局は口だけになる。

そんなのは嫌だった。

だったら、今のこの関係を大事にしたい。

なのに、なんでこの人はわかつたくれないの？

《稲山君には、もっといい人が見つかるって》

稲山が他の女の子と付き合っちゃうなんて考えたくはなかったけど、でも、私じゃダメなんだ。

稲山を幸せにできるわけがない。

《与瀬がいいんだよ》

なんで…そこまで私にこだわるの？

もっと、可愛くて素敵な女の子なんかそこら辺にコロコロいるのに…

《稲山君が、余計なことしなければ、私はあなたを…》

たまらなくなつて、そんな中途半端なメールをしてしまった。

《俺を…なに？》

うまい言葉が見つからない。

《電話していい？》

私はとうとう折れて、稲山にそんなメールを送った。

《いいよ》

OKのメールが来たとき、すぐに電話帳から稲山の名前を探す。

そして、携帯を耳にあてた。

ワンコールが鳴る前に、稲山は電話にでてくれた。

『どうした？』

「もし、稲山君が、私と付き合えたとしたら、稲山君は私を離さない？」

『うん。信じて？』

「私、稲山君を信じていいんだよね？」

『絶対大事にする』

「…好きだよ」

『えっ?』

「私も、稲山君が、好き。だから…付き合ってくださいませんか」

『俺も、与瀬のことが好き。』

『よかった。与瀬と付き合えて』

「うん。私も」

溢れそうな涙をぐっとこらえて、私は稲山との愛を誓ったんだ。

『なあ、”いつき”って呼んでいい?』

「えっ…? い、いいよ…」

いきなり私の名前を呼ばれ、びっくりして声が裏返ってしまった。

『じゃあ、…いつき。これからよろしく』

「う、うん。よろしく」

『あれ? いつき、俺の名前知ってるっけ?』

「そういえば、聞いたことあるような、ないような…」

『“暎治”…俺、”えいじ”っていつから』

「えい…じ…わかった。私もそう呼ぶね。」

『おう。あつ、親父帰ってきた。もう切るわ。』

「うん。ごめんね」

『なに謝ってたんだよ。じゃあな。…愛してるよ。』

「えっ…あ、うん。じゃあね！」
『クスッ…じゃあな』

ブツン、プープープー

私は携帯を耳にあてたまま固まっていた。

い、いいい今…あ、愛してる、って…

ドキドキが止まらなくて、顔が熱くなるのがわかる。

でも、私は笑っていた。

この人が、私にもう一度幸せを与えてくれた。
愛をくれた。

この私を…大事にしてくれるんだ。

私は今までに感じたことのない幸せを感じて、私はもう一度、彼、
暎治との愛を誓ったんだ。

10話：鼓動

私と暎治の交際が始まって1週間。

今日は、暎治との初めて、デートができる。（もう”2人っきりのお出かけ”なんて言わせねえ！）

最初のデートだということで、夜、ご飯を食べに行く約束をした。

花柄のピンクのTシャツにショートパンツという、少々奇抜な格好に挑戦してみた。

『いつき』

私の目の前に映る私の彼。

部活からの帰りだったのか、部活Tシャツをきていた。

「お疲れさま。早く中入ろうか。暑かったでしょ？」

女の子としての気遣いは大事！私たちは、近くのレストランに向かう。

「ほら」

急に止まって、彼は自分の左手を私に差し出す。

…そうだ。

私たち、本当の恋人になったんだっけ。

私はあらためて、この幸福感を味わう。

私も、自分の右手を彼の左手に絡める。

恥ずかしくて顔を下げた。

彼も恥ずかしそうに笑いながら、夜の道を歩いていった。

「今日ありがとうね。楽しかった。」

「うん。俺も」

もう、時間は夜の9時をまわっている。

私たちは、人通りが少ない道を歩いていく。

「なあ、いつき」

「なに？」

「好きだよ」

私は足を止めた。

真剣な表情で私を見つめる暎治。

「私も…暎治のこと、好きだよ」

恥ずかしくて意識がどこかへ飛んでしまいそうだ。

その瞬間、暎治は私をギュッと抱きしめた。

「キス…していい？」

突然の彼の発言。

私はなにも反応ができず、うつむいた。

彼とのキス…

したい…

だが、恥ずかしくて”したい”と言えない。

「嫌？」

彼は、私の顔を覗き込む。その彼の額に私は自分の額をあてる。

お互いの唇が付くか付かないかの距離を保ち、私は考えていた。

「いいよ」

その言葉だけでも精一杯だった。

彼はニコツと笑った。

そして、

私の唇に柔らかいものがあたる。

最初は、軽く、角度をかえながら唇と唇が絡み合う。

「ん」

やがて、彼の熱い舌が私の口の中に侵入する。

的確に私の舌を吸い上げて、絡まってくる。

あっという間に、私の力が抜け、体がとろとろと溶けていく感覚に襲われた。

私の意識が遠退いたとき、彼は私の胸に手を伸ばして優しくさわった。

「ちょっと、誰かに見られるよお……」

「大丈夫だって。」

不安な表情になる私の唇に、また彼は口付けた。

そして、その手は、私のＴシャツの中に侵入し、私の体をなぞった。

あまりの気持ちよさについ声が漏れてしまう。

その手は、下へ降りていき、私の太ももを撫でた。

「いやっ…ダメ」

私は急に怖くなって、彼の手を止めた。

いくらなんでも早すぎる。私たちは、付き合ってまだ1週間しか経ってない。

しかも、外でこんなこと…誰かに見られたら、私は…。

「怖い？」

私はコクリとうなずいた。

緊張しているせいか、私の手は小刻みに震えた。

そんな私の姿を見た彼は、フツと笑って私の額にキスをする。

「まだ怖いなら仕方ないな。急にごめんな。」

「私こそ…暎治に伝えてあげられなくて…」

「謝るなって。今日は帰る？また今度、ゆっくりやろうな。」

そういつて、再び彼は私にキスをし、また私の手を握って帰り道を歩いた。

今でも彼の唇の感触は覚えている。

こんな幸せなことがずっと続けばいいな。

私は星空に向かって、永遠の愛を願った。

11話：小さな亀裂

私たちの交際は、順調に進んだ。

彼は、相変わらず優しく接してくれる。

だが、1つだけ不満に思っていたことがあった。

彼は、学校や学校の近くでは、2人つきりにさせてはくれない。

『他の奴らとか、部員にばれると面倒』

彼の言葉でかすかに胸が痛む。

つまり、ばれたら、最悪別れなければいけない状態になるかもしれない。

それは、私への愛が小さいことを意味する気がしてならない。

彼だつてばれることを覚悟で、ばれても尚愛し続けることを決めて付き合つたのではないのだろうか。

そう思うと少し不安になってくる。

だが、そんなことを気にしてはなににもできなくなってしまう。

私はあまり、深く考えることをやめ、いつものように、彼とメール

をする。

《そういえば、もうすぐ文化祭だね。暎治は、来週の文化祭の準備行く?》

《そうだな。うん、行くよ。佐原と岡野と道具作る。》

《そっか。私も一緒にいい?》

《いいよ。》

4人でいるなら許してくれる。

でも、せっかく近くにいられるんだから、ここはわがままを言っ
てはいけない。

《やった!じゃあ、演劇部の休憩時間とか使って、そっち遊びに行
くね。》

文化祭では、演劇部の発表もあるために練習でクラスの手伝いに行
くことはできない。

仕方ないが、私は休憩時間に暎治たちのところへ顔を出すことにし
た。

*

文化祭まで後4日。

今日は学校で文化祭の準備に取り掛かるために、生徒は残り少ない
夏休みの中で文化祭の準備に参加した。

もちろん、暎治や、岡野や佐原もいる。

「ヤッホー！久しぶり！」「久しぶりだな！」

4人でいつものように会話をする。

結局私は、ほぼ部活をさぼって、4人で大道具作りに没頭した。

いっぱい笑って、たくさんの汗をながし、これはこれで、私の大切な思い出になった。

いつの間にか、辺りは暗くなり始めていた。

演劇部の活動も終わり、それから3人が終わるのを待っていた。

「岡野、ドライバーない？」

「ドライバーは持ってきてない。」

どうやら、暎治は、ドライバーを探しているようだった。

「職員室とかに行けば借りられるんじゃない？」

私はそう提案した。

「はあ……面倒。取りに行くか。」

大きく息を吐いて立ち上がる暎治。

「私もいつていい？」

「うん、いいよ。」

私は急いで立ち上がって暎治の後を追いかけた。

誰もいない廊下を2人つきりで歩く。

次第に彼との距離が近くなり、指の先を絡ませる。

「これが狙いだっただんどう？」

「えへっ、ばれた？」

私の考えは彼に読まれていた。

やっぱり、好きな人とは、一緒にいたい…

「いつき」

「ん？——んっ！？」

いきなり自分の名前を呼ばれたと思えば…彼は私にキスをした。

すぐに暎治の舌が入ってくる。

暎治とするキスは、大好きだった。

もつと暎治とキスしたかったのだが、人目を気にして、お互いにスツと唇を話してしまう。

私を見つめる彼の瞳は、優しく、輝いていて、いつも私を綺麗にさせてくれる。

「ほら、早くドライバー借りて帰るよ。」

なんだか照れくさくなってあわてて彼の前を歩く私。

このまま、職員室が…

…遠ざかってしまえばいいのに。

私は小さく、ホントに小さくつぶやいた。

12話：愛情の表現

なんだか最近寂しくて、会いたくてしょうがない。

付き合ってから、私の彼に対する気持ちは強くなっていく。

すると、自然に思うこと…

彼——暎治と1つになりたい…暎治に触れたい…

暎治との待ち合わせで、私の身体が疼く。

2時間くらい待って、ようやく部活帰りの暎治を見つけた。

「お疲れさま。」

正直、2時間外で待ちぼうけはきつかった。
だが、あへてそこは伏せておいた。

「どこ行くの？」

私は暎治に尋ねる。

「ん？……人気のないところ。…おいで？」

一瞬、暎治の言葉に疑問を感じたが、笑いながら手を差し伸べてくれる暎治を見たら、なんだかそんなのどうでもよくなった。

「暎治…ここ…」

ようやくたどり着いた場所、そこは、本当に人気のない駐車場。

ドキドキと胸が鳴る私。

やがて、暎治がこちらを振り向いた。

「いつき…俺、まじでお前のこと愛してるからな」

そう言って強く私を抱きしめる暎治の腕は、いつもよりきつい気がした。

でも、その強さが私はたまらなく嬉しかった。

私の辛い過去、レイプにあった私の汚れた心を受け入れ、「俺が守る」と言ってくれた。

誰かを信用することに恐怖を感じていた私に、再び、信じることの

喜びを教えてくれて、暎治を幸せにできるかわからない不安に襲われていた私に、「俺がお前を幸せにする」…そう言ってくれた。

その時の暎治は、私のために相当の覚悟を決めてくれたと思うと、さらに暎治への愛が深まる。

私も…この人を大事にしなきゃ…私もこの人のために、頑張らなきゃ…

そう思っていると、私は自然に彼の唇に口付けていた。

身長差がかなりあるためにうまくキスできない私の頭を持ち上げて唇を絡める暎治。

やがて、暎治の熱い舌が入る。
私もそれを受け入れた。

2人の熱く、荒くなつた吐息が響く。

私の意識が遠くなったとき、私の服の中に暎治の手が入る。
そして、私の胸へ触れる。

「んっ…」

つい、驚いて声を漏らす。

その大きな手のひらの中で遊ばれる私の胸。

そして、その手は私の太ももへと降りる。

「んっ… 暎治…」

完全に力が入らなくなった私は、もはや抵抗など出来ない。

下着の上から、私のをなぞる暎治。

「入れていい？」

耳元で小さくつぶやく暎治の声に、ビクッと身体が跳ねる。

それを感じとったのか、暎治は、私の耳の中に舌を這わせた。

クスッと笑って、再び舌を這わせる暎治。

すると、スツと下着の中にも暎治の手が入ってくる。

笑いながら私を見つめる暎治。

恥ずかしすぎて顔が赤くなるのがわかる。

「愛してる…」

そうつぶやいた暎治は再び私の唇に口付ける。

すると、私のナカに暎治の細く長い指が入る。
そして、その指はバラバラになって私を乱す。

自分のいやらしい声に耳を塞ぎたくなるほど恥ずかしかった。

だけど、暎治は容赦しない。

「いつき、。すごくかわいいよ。」

暎治の吐息も荒くなって、さらに私を興奮させる。

暎治は指をスツと抜くと、自分のズボンのファスナーを下ろした。

恥ずかしくて私は目のやり場をなくす。

そんな私を後ろ向きにし、壁に手をついた。

そして、とうとう私のナカに圧倒されるものが入る。

「あつー!」

あまりの勢いに悲鳴に近い声を漏らす。

「ナカには、出しちゃ、ダメだよ…」

「わかってるって…」

すでに、2人とも汗で体がベタついていた。

そんな中、暎治のモノが激しく私をつく。

頭が真っ白になりそうだ。

それよりも、こんなところを誰かに見られないかが心配になった。

そんな中、一番先に果てたのは……暎治だった。

約束通り、暎治は私の外で欲を放った。

「はあっ、俺の方が早かったな」

疲れた顔で言う暎治。

「でも、気持ちよかったよ。」

「またやろうな…」

最後に私は再び深い深いキスをした。

私は、暎治が大好きでたまらなくて、暎治と離れるなんて考えたく
なかった。

やっと愛する人と一緒になれて、私は心の底から喜んだ。

お願いです、神様…

…この愛を、引き離さないでください。

暎治…

…私も…愛してるよ…

13話：距離感

楽しみだった夏休みもあっという間に終わった気がする。

だが、夏休みにはいろんなことがありすぎて頭の中では整理しきれない。

文化祭も無事に終え、気付けば私の学校では体育祭の準備でバタバタしていた。

そんな中、冷静に悩んでいるのは私だけなのだろうか…

暎治と付き合って早1ヶ月。

私は、少し早い倦怠期というものに悩まされていた。

なんだか最近の暎治はどこか冷めていて私のことを忘れている気がしてならない。

自然と寂しさを感じる。

だが、わがままは言ってられない。

私は少し放ってみることにした。

そんな中、ある日突然、私のところに一件のメールが来た。

佐原からである。

《1つ、聞きたいことがあるんだけど…》

あいさつなしでいきなりそのメールはびっくりする。

《なに？》

おそろおそろ佐原に尋ねる。

《お前さあ、稲山と付き合ってたの？》

なにも言えなくなった。

そう、まだ岡野と佐原には私と稲山の交際については話していないのだ。

いつかは言わなきゃいけないと思っていたのだが、もし、あの2人に話して友情関係が崩れたら、と思うと言うのがとても怖くなったのだ。

友情関係が簡単に崩れてしまうことを知っているから尚更だ。

《もし、付き合っているとしたら、佐原君はこの友情関係を壊す？》

本当はこんなこと送りたいなかった。

だが、自然と文字を打っていた。

《壊すわけないだろ？》

だが、そう言われたときは嬉しかった。

友情関係が崩れることを恐れていた私に、《正直驚いたけど、俺は2人を応援したいし、簡単に壊すわけないだろ?》と言われて私は涙が出そうになった。

私は、いい人たちと巡り合ったと思う。私って幸せ者だと心から思った。

大事にしなきゃと思った。

そして、私は携帯をぎゅっと抱きしめた。

*

体育祭当日!!

うちの学校は、赤、青、黄色、緑の4つの色に分かれて体育祭が行われる。

私のクラスは青。

学校のロゴが入った青いTシャツをかぶった。

よっしゃ!!

手加減はしないぜ!

と言っても、もう2年も運動していないこの体が、果たして動くのだろうか。

まあ、そんなこと気にしてたらなにも始まらない。

やる気十分の私は、持っていくよう指示された教室で使っている自分の椅子を抱えて教室を後にした。

私は、思い切って暎治に声をかけてみることにした。

「暎治…」

だが、ちらつと私を見た暎治は頭を下げてスッと私から離れていった。

暎…治…？

なにか悪いことでもしてしまったのだろうか。

競技から暎治が戻ってくると、暎治は疲れた顔で椅子に座りこんだ。

「お疲れさま。」

私はいつもの笑顔で暎治をタオルで扇ぐ。

すると、暎治がなにかを訴えている。

手を何度も振って、もういい、あっちへ行け、というかのように。

「嫌だった？」

私はおそろおそろ聞いた。

コクリとうなずく暎治。

私は、寂しさをぎゅっとおさえて次の競技にむかった。

結局、暎治とはほとんど会話をしなかった。

寂しさと悲しみでたまらなくなった私は、思い切って暎治にメールを打った。

《私と付き合って、後悔してる？》

聞くのは怖かったが、そのまま不安を抱えたくないし、隠し事はしないでほしい。

《なんか、いろんな人に俺らが付き合ってるのばれちゃって、そして、急に一緒にいるのが恥ずかしくなっちゃって》

だったらそうと早く言ってくれればいいのに…
だが、ばれたからって距離を置くんなんて…

私はいつかばれることを承知したうえで異性との交際を決意した。だけど、暎治は、違かったのかなあ…？

そう思うと、前に言ってくれた覚悟の言葉がだんだん嘘に思えてきた。

《そっか…嫌だった？》

不安が増していく

《まあ、別に嫌じゃないけど…》

そんな曖昧な返事が私の心を傷つける。

《でも、いつき。俺はお前のこと愛してるし、それはこれから変わらない。お前が必要なんだ。だから、お前と付き合ったことに、後悔はない》

私って単純だと思う。

こんな言葉でコロツと認めてあげるだなんて。

まあ、何はともあれ、なんとか解決したし、私も気にすることなかったかな。

その時は、そう思っていた。

14話：幸せの光

今日の部活の帰りは、暎治と会うことになっている。

だが、やはり暎治は人目を気にするために、ちゃんとしたデートをしてくれない。

「あれ？与瀬、今日はそっちから帰んの？」

「うん。用事があるからさ。」

「そっか。じゃあ、また明日ね」

「うん。お疲れ！」

友達を見送って、私は呼び出されたところへ向かう。

狭く、細い道。

まあ、確かにここなら人目につかないか。

でも…少し、少しくらい、甘えたいし、手をつないで一緒に歩きたいよ。

でも、暎治の顔を見たら、そんな気持ちはすぐにどこかへ消えてしまふ。

本当に私って単純。

でも、顔を見るだけで安心できるのは、それだけ大切な存在だからだと思う。

狭く細い道を2人で並んで歩く。

「どこに行くの？」

小さな声で尋ねる私。

「公園」

「ふーん…」

そんな短文繋がりのお話をしているうちに、公園につく。

「わあー！公園なんて何年ぶりだろ！」

私は公園についた途端、子供のように公園をかけた。

「子供か！」

暎治に突っ込まれる。

「いいじゃん。今日だけ、子供でいさせて？」

「なんだそれ。…いつかはいつ見てもかわいいな。制服もすごい似合う。」

「ありがとう。暎治、大好きだよ。」

暎治は私の手をぎゅっと握った。

「ベンチ、座ろうか」

暎治に導かれ、2人並んで座る。

私に寄り添う暎治。

私は、暎治の手を握って寄りかかった。

2人でいるだけで安心する。

大事なことは2人でいることをどれだけ周りにアピールできるかじゃない。

私はしみじみと思うのだった。

*

今日は、暎治とのデート。

今回は映画デートだ。
すごく楽しみである。

夕方待ち合わせして、2人でご飯を食べる予定だ。

2人とも部活帰りで、制服が目立つため、途中で私服に着替えてか

ら、現地で待ち合わせした。

暎治に私のミニスカートを披露するのは初めてである。少し緊張はするが、やはり、女の子として見られたい。

「ごめん。いつき、待たせたな」

そういつて私服で現れた暎治に私は鼻血を出して倒れそうになった。

七分丈のカーゴパンツにVネックのTシャツ。

そのVネックから顔をだす鎖骨や首筋。

私のフェチゾーンである。

ま、まあ、そんなことは置いといて…

私たちは荷物をロッカーに預けて映画館に向かった。

*

まだ、上映時間まで時間があつたので、私たちは近くのゲームセンターで暇を潰すことにした。

「わあ、この人形可愛い！」

UFOキャッチャーを見ているとき、私は大きなカピバラの人形に一目惚れして、しばらく動けずにいた。

だが、私の技術ではとても取れない。

私は諦めて別のところへ向かおうとした。

「これ欲しいの？取ってやるよ。」

そういつてポケットから財布を出す暎治。

「いいよ。こんなの取れないって」

「いや、とれるだろ」

そういつて機械に500円も挿入した。

「そんな、いいって」

あまりの行動力に私はあたふたした。

真剣な表情でターゲットを狙う暎治。

1回目は…案の定失敗

2、3回目も惜しいところまではいくがなかなかゲットまでは繋が

らない。

「もういいよ。他の見よ？他にもいっぱいあるから。」

「待って、取れそうなんだって」

いつになく真剣な暎治。

そして、ドキドキの4回目…

コロッ

「ああ！惜しい！待っていつき、後一回で絶対にとれるから」

1人で興奮して、とても楽しそうである。

やっぱり、暎治の笑顔はいつも輝いていて、大好きだ。

「ほら、来たああ！！！！いつき、とれたよ。欲しかったんだろ？やるよ。」

「ええ、もらっていいの？嬉しい！ありがとう！」

「じゃあ、それ持って、プリ撮りにいくぞ」

「うん！行く行く」

私たちは空いてるプリ機を見つけて、中に入った。

今日はなぜかドキドキするのは私だけだろうか。

暎治は私を見つめて、無言で私にキスをした。

暎治の舌が私の舌を絡めとる。

そして、暎治の手が私の胸に触れたとき、私は暎治のその腕を止めた。

「それもいいけど、今はプリ撮ろうよ。」

「ああ… そうだな」

ごめん、というかの如く、私に苦笑いを見せる。

「記念にチュープリ撮ろうぜ」

結局、私たちはあの狭い機械の中で、愛を交わしたのだった。

*

「楽しかったな。」

「あの映画感動しちゃったよ」

「そうか？」

すっかり遅くなってしまった私たちはゆっくりと外を歩いていた。

「なんかさあ、人気の少ない場所とかない？」

「え、だったらこっちに」「いくぞ」

「はい？」

私は暎治に引つ張られて、人気の少ない場所を目指した。

*

やがて、たどり着いたのは本当に人気の少ない場所。

近くに、使われているのかわからないエレベーターが設置されていた。

「いつき…」

小さく私を呼んだかと思うと、そっと私にキスをした。

唇と唇がかすりあう優しいキス…

暎治の指が私の首筋をなぞる。

くすぐったいような、でも心地いいような。

そんな感覚に泳がされたとき、暎治の指はだんだん下へ下がり、ついに、太ももに到達する。

指を私のナカに入れるのかと思えば急にその指を私から離れた。

「暎治？」

すると、暎治はズボンのベルトをはずし、ファスナーを下ろした。

「ほら、後ろ向いて？」

恥ずかしい気持ちを隠しながら、私はしぶしぶ後ろを向いて壁に手をついた。

「んっ……」

音をたてて暎治のモノが私に触れる。

暎治も、息を荒くして私の体に触れる。

ものすごい勢いで私のナカに入る暎治のモノ。

暎治は、一呼吸おいて、その私のナカに入っている自身をゆっくりと動かし始めた。

とても気持ちよくてたまらない。

今にも頭が真っ白になりそうである。

「暎治…っ」

「なんだ…？」

理性を奪われてしまいそうで、なんだか、自分が自分じゃなくなる
みたいですごく恥ずかしい。

やはり先に果てたのは、暎治だった。

アスファルトに白く濁った愛液がぶちまかれる。

「いつき、大丈夫か？」

「うん。気持ちよかった…」

暎治はニコツと笑って私に再びキスをした。

「遅くなっちゃったな。帰るぞ。」

「うん」

私たちは違う電車で帰るため、駅でバイバイする。

「また明日ね」

「おう、また明日」

2人は同時にお互いに背を向けて歩きだした。

もうちょっと… 暎治と一緒にいたかったなあ。

そう思ったとき、私はピタッと足を止めた。

そして、急いで携帯を取り出す。

すると、

ヴーヴーヴーヴーヴー

同時に私に電話がかかってきた。

暎治からのものだ。

私は急いで携帯にでた。

「暎治も…気付いた？」

「ああ、」

すっかり忘れていた。

そういえば私たち…

「ロッカーに荷物預けっぱなし!」

15話：暗くなる第二部

全く…昨日は散々だったよ…。

ロッカーに荷物を取りに行こうにも、お店自体が閉まってて、警備員のお兄さんに渋々お店開けてもらって…なんだか、恥ずかしかったというか…警備員のお兄さんには申し訳ないことをしてしまったよ。

いつものように学校に来た私はそんなことを考えていた。

「早く暎治こないかな」

1人で浮かれていると、大きな部活バッグを持った暎治が教室に入ってきた。

「暎治！おはっ」

「おう」

相変わらず素っ気ない挨拶。

だが、今日に限ってはすごく冷たく、机に着いたあとはそのまま突っ伏してしまった。

「暎治…？」

私は暎治に近づいた。

だが…

「疲れてるから、今は声かけないで」

小さくつぶやく彼。

「……………わかった…」

私は静かに彼から去った。

最近はずっとこんな感じ。私は、彼が嫌がることをしてしまったのではないかとすごく心配になった。

*

結局、彼とはあれから一言も会話をせずに学校は終了した。

ズキズキと痛む心。

私は、本人に確認する前に岡野に相談をもちかけてみることにした。

まだ岡野は、私と暎治が付き合っていることを知らない。

《あのさ、今日稲山君怒ってた？》

もしかしたら、私に言えなくて岡野君とかが知ってる悩みがあるかもしれない。

異変に気付いたらとことん追求してしまう私。

私は必死に携帯画面に食い付いた。

5分ほどできた岡野からの返信。

すぐさま受信ボックスを確認した。

《ああ、怒ってたかもね。俺はよく知らないけど》

《なんか私、怒らせるようなことしちゃったかなあ？》

《わかんないけど…あんまり気にすることないんじゃない？》

いつでも優しい岡野。

大事な友達に隠し事をしてしまっている自分に罪悪感を感じ、腹がたった。

きつと…岡野君ならわかってくれる…はず。

私は勇気を振り絞って、映治との交際について全部を岡野君に話した。

《そっか…》

最初はそんな素っ気ない返事だった。

私は怖くなった。

この報告によって、友達関係が崩れてしまうことが。

だが、そんなことはなく、岡野君は優しく受け入れてくれた。

《こんなんで友達関係崩すわけないだろ？大切なものは絶対に守るって言つたろ？それに……………》

突然文が途切れて焦った。

《それに？なに？》

《いや、なんでもない。気にするな》

なぜそこまで焦らす？

《いいから。なにか言いたいなら言って？受けとめるから》

岡野君も大事な人の1人。やはり、お互いに支えあっていくことって大切だと思う。

《いや、だから…言っるのが怖かった。…これで察してくれたら嬉しい。》

いや、無理。

なにを言っているのかさっぱりわからない。

《わかんないんだけど》

でも今思つと、察してあげられなかった自分に後悔した。

《あゝくそっ！だから…好きって言つのが怖かった。臆病な自分に反省》

一瞬固まった。

『好き』という言葉の意味を頭の中で何回も考えた。
でも、どっちにしろ答えはひとつ。

—— ありがとう

この言葉しか返せなかった。

でも、この関係はいつまでも続けていきたい。

岡野君のあの一言も、自分の中ではものすごく大きく感じた。

守りたくなるほどの大切な存在が私の側にいて、私を大切な存在としてくれる人もいる。

私は、なんて幸せ者なんだろう。

…と浮かれている私に、黒い影が迫っていることなんて……
……

誰も知る由もなかった。

16話：悲劇の始まり

暎治への不安を抱えたまま、学校へ来た私は挨拶もする気力もなくそのままストンツと椅子に腰を下ろした。

「おい、与瀬大丈夫か？」

佐原が私の異変に一番に気づいてくれ、心配そうに声をかける。

「もしかして、喧嘩か？」「いや、喧嘩ってわけじゃなくて…なんか、暎治怒ってるみたいで…私にかしたかなあ…」

だんだん不安に押しつぶされそうになる私…

佐原は無言で立ち上がり、机に突っ伏している暎治のところへ行っ
た。

暎治に事情を聞いてくれているのだろうか…

正直、ありがた迷惑である

怖くてなにも聞きたくないのに、なんでほっといてくれないの？

私は耳を塞いでうずくまっていると、佐原がこちらへ帰ってきた。

「あんたが悪いよ。気にしすぎなんだよ」

冷静に話す佐原の言葉が胸にグサグサと刺さる。

本当に空気読めない人…

私の気持ちなにも知らなくせに軽々しく物を言い放つ佐原に怒りさえ感じた。本人は良い事をしたと思っっているのかもしれないが、正直逆効果である。

それに、佐原はなにかと暎治の味方につく気がしてならない。一切私の不幸に目を傾けてくれない佐原を見て、私はがっかりした。

*

そんなこんなで、今日も暎治とはろくに会話も出来なかった。

もう我慢の限界で、いてもたってもいられなくなった私は、暎治に事情を聞くことを試みた。

《怒ってる？》

いたって普通の文面。

私は携帯電話から目を離すことなく、暎治からの返信を待った。

チ力チ力チ力…

メールの来た合図と同時に飛び付くようにメールを確認する。

《怒ってないよ。》

優しい笑顔のニコニコマークを語尾につけて送られてきた返信。

少しほっとした。

だが、やはり聞きたいことが1つある。

《私と付き合って、後悔してない？》

今となつては暎治は大切な存在。

暎治の幸せは守ってあげたくて私はもう別れるかまだ付き合うかの選択肢を与えた。

私はもちろん、この縁を切りたくはない。

《別れたいわけないだろ？俺はお前を愛してるから。》

この一言によって、私の心が救われた気がした。

やっぱり、この大事な存在を失いたくない。

いや…彼はもう、私を離したりしない。

私は彼を心から信頼し、愛することを誓った

*

今日は暎治の部活が休みの日。

私と暎治は今日一緒に下校することを約束した。

「少しだけ集まりがあるから、いつきはここで待ってて」

それだけを言い残して彼はさっさと部活へと急いだ。

1人寂しく教室に取り残される私…

スッと目を閉じる。

気付けば、私たちの交際スタートからもう2ヶ月になろうとしている。

ホント、月日が経つのは早い…

私はしみじみと1人の時間を過ごした。

*

やがて、静かに暎治が戻ってきた。

すると…

カチャッ

教室の鍵が閉められる音がした。

「おいで？」

ニコツと笑って教室の端に誘う暎治。

私は恥ずかしそうにうつむきながら暎治に近づく。

そして、暎治は頭から私を抱え込んだ。

ぎゅうと締め付ける暎治の腕から愛を感じた。

暎治は私にそつと口付けをした。

私もそれに応えるように、そつと目を閉じて快楽に溺れた。

暎治は左手で私の胸に触れた。

んっ、んっ、と息を漏らしながら私は暎治にしがみついた。

いつもの流れで、暎治はズボンのファスナーを下げて、自身を露にした。

私をそつと椅子に腰を掛けさせると、露になった自身を私の口の前へもっていった。

驚きのあまり、ビクツと身体が反応した。

だが、私は暎治を信じて、震える唇を開け、暎治のモノをくわえた。

優しく、ゆっくりそれを舐めてゆく。

だが、それでも歯がゆいのか、暎治は自分から腰を動かした。

「んっ、んんっ」

窒息死してしまいそうなほどの苦しみが、私を不安にさせる。

それに気がついたのか、暎治は私を宥めるかのように、手を私の顔に置いて優しく撫でていく。

それが、私の不安を安心へと変えていく。

暎治の快楽の波が頂点にさったとき、私は暎治のモノを口から離した。

白濁の愛液が私の服を汚していく。

「足、ひらいて？」

私は、ナカにいらしてもらえることを期待した。
自分でもはしたないと思う。

こんな快楽にハマってしまっていることが…

だが、暎治は自身をズボンの中へ戻してしまった。

そして、しゃがみこんだかと思ったら、暎治は私の太股に顔を埋めた。

「——っ！——」

次の瞬間、感じたこともない衝撃が私を乱す。

暎治の熱い舌が私のナ力を掻き乱していく。

教室ということもあって、安易に声を出すわけにいかず、自分の手で口を塞いだ。

いやらしい水音と荒くなった2人の吐息だけが教室に響く。

私の足がガクガクと震えてきたところで暎治は私のナ力から唇を離れた。

それと同時に、フツと私の力が抜けて暎治に身を預ける。

優しく頭を撫でる暎治

私は幸福感に満たされた。

*

「はあ、授業疲れるう」

翌日の学校では、授業を終えて伸びをする私がいた。

昨日ここで暎治と……………

今思うと、なんだかとても恥ずかしくなって顔が熱くなる。

私は、次の準備をしようとロッカーへ立ち上がった。

だが、後ろを振り返った瞬間、目を疑うような光景を目の当たりにしてしまう。

私の目に映っていた暎治は――

――他の女の子と身体をくっつけて楽しそうに笑っていた――

17話：苦い涙

それから3日後…

すっかりしない心を引き摺って、約束のデートの日を迎えた。

でも、せつかく2人で会えるんだし、楽しみたい。

信じるって決めたじゃない。

やっぱり、ちよつと女の子と話してたくらいで嫉妬やくなんて馬鹿馬鹿しい！

それに、それくらいで怒ってたら、暎治を束縛してるみたいでこっちの気も晴れない。

“愛してる”って言うてくれたんだ。

ちゃんと私のことを思ってくれてるんだから、わがままは言っちゃいけない。

私は楽しみにデート服を選んだ。

チ力チ力チ力チ力…

メール？

誰からだろ…………

メール画面を開くと、その正体が暎治のものだとわかった。

私は受信ボックスを開いた。

そこに書かれていた、メッセージ……………

それは……………

《今日行けなくなった》

ドタキャンメールだった。

私はショックだった。

なぜなら、これが初めてじゃないからだ。

1回や2回のキャンセルならなんとか許せた。

だが、こんな形は初めてだ。

理由を聞けば、親の言うことが云々だとか、疲れただとか……………

……

もう限界だった。

散々寂しい思いさせておいて、私の気持ちになんか気にもとめず、自分のことしか考えない暎治にひどく腹がたった。

暎治の馬鹿……………

《じゃあ、もういいよ！勝手にすればいいじゃん！！》

涙ながらに怒りのメールを送った。

私は、だんだん暎治がなにを考えているのかわからなくなり、私の心は不安で暗くなっていった。

*

あれから、3時間が経過しただろうか。

私はあれから眠りについていた。

私は重たい体を動かし、携帯のメールをチェックした。

だが、そこには何にも返信は来ていなかった。

ちよつと言い過ぎたか？

私は急いで謝罪のメールを送る。

すると、意外と早く返信が来た。

《俺もごめんな》

少しは安心した。

だが、心が晴れる感じはしなかった。

今日の出来事で私は、暎治に対して不信感を抱くようになった。

*

それから1週間。

暎治とは会話が少しずつ減っていった。

「暎治。今日部活休みなんですよ？一緒に帰る？」

だが、暎治は首を横にふり、「疲れてるから」と言っただけで机に突っ伏してしまふ。

不安に押しつぶされそうになり、余計苦しい。

「そっか」と言っただけで私も自分の席へ着く。

すると、暎治の楽しそうな笑い声が私の耳に届く。

そこに映っていた暎治は、他の女の子と楽しそうに話す姿だった。

私とはろくに会話をしてくれないのに、最近はいろんな女の子に声をかけては楽しそうする暎治を見て、怒りと寂しさが込み上げてくる。

また捨てられる、という不安と焦りが、少しずつ私を壊していった。

*

《部活終わったよ》

いつものように、暎治から部活終了のメールが送られてくる。

《お疲れさま》

私もいつものメッセージを送る。

だが、気持ちは不安だらけである。

私は、暎治に今の私の気持ちを伝えた。

涙を堪えながら長い長い文章をうっていく。

送信して30分ほどでその返信は来た。

《そんな辛い思いさせてたんだな。ごめんな。

でも、深く考えないでほしい。

いつきが嫌いになったりとかはしてない。

ただ、最近のいつきは違うんだ。

俺の好きないつきじゃないっていうか、だんだんいつきが変わってきてて……

最近話さないのは、特に話すことがないからだよ。

2人で会ってるときだっていっぱい会話するから、ネタがないんだよ。》

おかしいよ。

きっと私が変わったのは、貴方が変わったから。

特に話すことないって……

前までは自分から声かけて話しかけてきたじゃん。

他の女の子と話してる内容は私には言えない？

最近はイタズラだってなくなって…… 暎治のイタズラでさえ、恋しいのに……

自分のことは棚に上げて、私だけを責めるなんて……

わからなくなった。

一体なにを信じたら良いのか。

私は頭を抱えた。

でもきっと、これは暎治なりの謝罪でもあり、素直な気持ちなんだ。

信じてあげなきゃ、という気持ちがどんどん私を苦しめていく。

とりあえず、了解メールは送り、その後は普通に恋人らしい会話を

した。

もう一度、あの幸せな日に戻りたい。

私の暎治への思いはさらにさらに強くなった。

18話：絶対禁句な台詞

それからさらに2週間…

仲直りもしてそれなりに関係は続いている。

だが、確実に、少しずつ、2人の距離は伸びていく。

「暎治」コーンスープ買ってきたんだけど、飲む？」

私はなるべく暎治の前では笑顔を見せた。

「知らない。だいたい俺、コーンスープ嫌いだし。」

暎治の鋭い一言が私の傷ついた心をさらにえぐっていく。

でも、辛い顔を見せれば暎治は呆れて私から離れていく。

そんな恐怖に毎日犯されながらも、私は懸命に笑顔をつくった。

「そっか。わかった」

でも、そろそろ我慢の限界で、私は必死に涙を堪え、爆発しそうな心を抑える。

だが、暎治はそんなにも私を苦しめたいのか。

さらに、追い討ちをかけるように。

「あのさ、無理して俺に近付かなくていいから。」

とどめを刺された。

「うん……」

もう涙がそこまで来ていてこれ以上は口を開けることすら出来なかった。

自分の席に帰った私は、暎治に気付かないようにおもいつきり泣いた。

今の私たちに、あの幸せはなく、もう帰ってはこない。

もう私が付き合ってから2ヶ月が過ぎた。

ホントに早い。

自己紹介で血液型が一緒だったことがきっかけで、意気投合し、夏休みには暎治から告白をしてきてくれた。
今でも覚えてる。

『変わらず接して、大事にする』

今ではそれが嘘のよう。

一体どうしてしまったのか、なにがあったのかもわからず、私はただひたすらあの幸せだった日を思い出して泣いた。

懐かしくて、恋しくて

でも今は、そんな幸せな日々がなかったかのように2人の距離はどんどん遠くなっていく。

信じて、って言ったのは暎治じゃん。

私と一緒にいたら不幸になっちゃうよ、って言ってもそれでも付き合う、離さないから、って言ったのも暎治。

『愛してるよ...』

この言葉は...嘘、なの？

わからない...わかんないよ.....

それでも時は過ぎていく。

その間も2人の距離は...

少しずつ広がっていく。

*

私は暎治にメールをした。

とにかく、暎治の気持ちが知りたくて、泣きながら私は携帯のメール画面に食らい付く。

自分は一体なにをしているんだ……………

なんだか、今の私は完全に暎治で心が埋め尽くされている。

なんでここまで必死になるのか。

それすらもわからないくらい、私の心は壊れている。

これでは、自分が暎治に一方的に片想いをしているみたいじゃないか。

なんで暎治があんなに必死になってまで私を彼女に選んだ？

もしかして……………

……………騙された……………？

少しずつ、暎治に対しての不信感や疑問が増えていく。

『暎治は、彼女ほしさに私の弱みにつけこんで、性欲処理の道具に使った…？』

最終的にたどり着いた答えはこれだった。

そう思えば思うほど、本当のように感じてくる。

その心は、今私が打っているメッセージにも表れていた。

放心状態のまま、私は送信ボタンを押した。

《俺と別れたいの？》

絶対聞きたくない言葉が、ついにでてしまった。

ガタガタと震える体。

そのせいかまともに携帯も操れなくなる。

私は冷静になって考えた。

暎治の幸せを考えると、もう自分から決断をくだすことは出来ない。

私は、絶対に離れたくない。

だが、それで暎治が不幸になってたら？

溢れだす涙。

やはり、暎治の幸せは守りたい。

だから、私は暎治の言うことを聞き入れよう。

最悪の状況を覚悟した

《別れよう》

予想はしていたが、いざこのメッセージが来ると、ズシツと体に重たいものが私を押しつぶしていく。

もはや私の心は粉々に引き裂かれ、黒く錆びて腐っていく。

《わかった。さよなら》

運命に従うしかない。

大事な人だからこそ、私は敢えて止めない。

それで、暎治が幸せになつてくれればいいから…

私は送信ボタンを押して、携帯を机の上へ置いた。

だが、涙が止まらない。

大事な存在を失つて、ポツカリと穴が開いてしまったかのような。

幸せだった頃の様子が今になって再び蘇る。

だが、それはかえって苦痛であり腐ってしまった心に痛みが走る。

「嫌だよ…離れたくないよ……………暎治っ…」

あの懐かしい光景がとても恋しくなつて、私は携帯を握り締める。

やっぱり…暎治と、幸せになりたい。

私は涙で歪んだ目の前と震える手で、必死に暎治を連れ戻そうと手を伸ばした。

だが、握り返してくるものはなにもなかった。

19話：操り人形

その後も私は放心状態になったまま、朝を迎えてしまった。

「今日は学校休みか…」

だが、部活がある。

こんな精神状態で部活に行くのは、気が進まない。
でもだからといってこんな理由で部活を勝手に休むのもみんなに迷惑がかかるし、私の気が晴れるわけじゃない。
重たい体を起こして、私は学校へ行く準備をした。

《今日会って話しがしたい。だから、一緒に帰らせてください。》

学校への登校時、私は暎治にそんなメールを送っていた。

もう一度やり直したくて…もう一度2人で笑いたくて……

そんな気持ちで、私は送信ボタンを押し、目の前に止まっている電車へ乗った。

*

もう何時間経過しただろうか……………

私は部活が終わってから長い間、ボツと教室の椅子に座っていた。

チカチカチカチカ……

ようやく来たメール。

震える手で私は携帯の画面を確認する。

《帰りながらいいよ。今日用事あるから、急いで来い。》

私は鞆を持って駆け出した。

校門のそばまで来ると、自転車にまたがった暎治がいた。

また…会えた…………

私は目の前にいる暎治を見て、つい涙が出てしまった。

「なに？話して…」

私より少し前に出て歩く暎治の低く、小さい声。

私は泣きじゃくりながら震える唇で必死に自分の気持ちを伝える。

捨てないで……………

愛してる、って言って

また2人で、笑いあいたいから……………

暎治は無言で私の話を聞いていた。

いや、聞いていてくれるのかさっぱりわからない。時折、携帯を気にする暎治に腹を立てながらも、私は必死に暎治に訴えかける。

「いつき……………」

急に自分の名前を呼ばれて体が跳ねる。

「……………戻ろっ」

「……………えっ…?」

「だから、カレカノに戻ろう、って…」

予想外だった。

彼から“戻ろう”と言ってくるなんて……

「だけど、条件がある」

「……………条件?」

「もし、またこういうことがあったら別れる。いいな?」

「う、うん」

「よし、じゃあ俺は用事があるから行くよ。じゃあな」

彼は自転車を方向転換させた。

「――暎治！」

だが、私は止めた。

体が勝手にそうしたのだ。今私はすっかり暎治の腕を捕えている。

私は彼を見つめた。

なにか言いたいけど、言葉が見つからない。

彼はニコツと笑って私の頭を撫でた。

「後でメールする」

そっいつて彼は去ってしまった。

言ってほしかった。

――愛してる

……と。

彼は、なぜ私と復縁を決意したのか。

本当に彼は、心が読めない。

*

私は家についてからもさっきのことを考えていた。

本当に、これで良かったのか、と……

恋人関係に戻れて嬉しいはずなのに素直に喜べない。

『今度またこういうことがあったら別れる』

暎治が言った一言がグサーと私の胸に突き刺さる。

私………試されてる？

暎治は本当に私を愛してくれてるのだろうか。

そんなことを考えているうちになぜだか怒りが込み上げてきた。

今思うと、私を愛してほしくて、私の愛も形が歪んでいってしまったからなのかもしれない。

でも、これだけは忘れない。

彼が私に残した大事なもの……………

人を信頼すること、誰かを好きになる喜び。

私は今までそれを忘れていたのかもしれない。

人を信頼しないことは、時に、その人の心に大きなダメージを与えることになる。

そして、自分自身を信じるものが出来なくなってしまう。

そんな自分が嫌いになって、やがてその人までもが嫌になっていく。

私は勝手に自分にバリアを張って、進むべき道を見失い、知らない間に人を傷つけてしまったんだ。

それで、自分が変わってしまいその人に不信感を持たせてしまった。

私が、もっと暎治を信じてあげていれば……………

だが、もうそんなことを考えても遅い。

私のやるべきことはただ1つ……………

今度は私が、暎治を幸せにすること。

私にはやっぱり暎治が必要。

そのためには私がもっと頑張らなければいけない。

暎治がすっかり私を見てくれるまで……………

だが、そんな気持ちが私を焦らせやがてそれは不安に変わる。

もうこの時の私は、暎治が好む私ではなかったのだから……………

……………

そんなこんなで朝を迎えてしまった。

考えごとをしているせいで、なかなか眠れずイライラしていた。

とにかく、ちゃんと暎治と仲直りできたんだ。

わがままを言っても仕方がない。

私は重たい体を引きずって学校へ行く準備をした。

*

あれからさらに1週間が過ぎただろうか……………

特にこれといった進展もなく、私は寂しさを感じていた。

他の女の子には楽しくしゃべりかけ、私と話すときは嫌そうに机に突っ伏してしまう。

私はその女子に、ジェラシーを感じるほど、徐々に心が汚れていく。

かまってよ……………

貴方の好きな人はここにいるよ？

今私は、すごく寂しくて、悲しいよ？

貴方が一緒にいなきゃいけないのは、その子じゃないでしょ？

ねえ……そばにいてよ……………

また捨てられるという不安と恐怖……………

そんなある日のこと。

「与瀬、稲山、岡野、佐原、…………（その他仲良しグループ）今日の大掃除の家庭科室の掃除は、このメンバーに任じていいかしら」

そっか、そういえばこの学校はそろそろ説明会が始まる。

大変になりそうだ。

だが、意外なメンバーに、クラスの誰もが驚いたに違いない…………

……

家庭科室に一番についたのは、私と岡野。
鍵を持っているからだ。

佐原や暎治、その他のメンバーも続々と家庭科室に集まる。

「よし！頑張るかあ」

晴れない気持ちを紛らわすように、掃除ロッカーに飛び付き、モップを振り回す私。

なるべく暎治を視界に入れないように、遠くの方でモップをかける。

だがそれはすぐに寂しさ変わる。

私が振り向いたとき、そこには私の友達と楽しそうに話す暎治の姿があった。

私は放心状態になった。

やがて、力は抜け、その場に座り込んでしまった。

そして、私の目からはなにか熱いものが込み上げてくる。必死に堪えた。

肩を震わせながらも必死に歯を食い縛った。

もう元には戻れない。

そんな現実が私にグサグサと突き刺さる。

そんな思いが、大きな粒となって私の顔を濡らす。

「どうしたんだ？」

.....!!

驚いた。

目の前に、私を心配そうに見つめる暎治がいるのだから……

「暎治い……………」

信じられなかった。

暎治が私に、声をかけてくるなんて……………

暎治は、家庭科準備室を開けた。
そして、目で”お前も入れ“と訴えた。

私は素直についていった。

ボタンと扉を閉める暎治。

ドキドキと鼓動をうつ私の胸……………

暎治は私をぎゅっと抱き締めた。
いつもとは違い、優しく温かい。

暎治はそっと離れると、次は私の唇に口付けた。

優しくて柔らかい暎治の唇……………

暎治の熱い舌が入ると、一気に快楽の道へと私を導いていく。

お互い息を荒くして、絡み合う。

そして、暎治は次に進もうと私の太股に手を伸ばしたとき……………

ダンダンダンダンッ

「「！！！」」

『与瀬！いるんでしょう？開けていい？』

しまった！

鍵をかけていなかったんだっただあ！

「ああ、ちょっと待って」

暎治は適当に相づちを打った。

「ちょっと、先に行ってもらっていいかなあ？鍵は私がやるから」

私は2人になりたくて、みんなに、先に教室に戻るように言った。

『わかったあ、先に行ってるね』

足音は次第に遠くなり、やがて静かになる。

私は再び暎治を見つめた。

「暎治……………」

「うん。俺も考えた。2人でいる時間が少なかった。ごめんな。」

私は暎治に飛び付いた。

暎治は私に再び口付けると、自分のズボンのファスナーをおろした。暎治は、自身をくわえるよう促した。

私はかがむ。

そして、唇の先にモノが触れる。

私は口を開けてくわえこんだ。

私は自分の頭を上下し、暎治のモノを刺激する。さらに奥までくわえこみ、愛撫していく。

だいぶ慣らしたところで暎治は自分のモノから私の頭を離した。

そして、近くにあった机に手をつかせた。

そして、ゆっくりと2つの影が重なった。

*

お互いの気持ちを確認して数日……………

それなりに仲良くやっていた。

相変わらず別の女の子にベタつく暎治だったが、出来る限りの我慢はしてきた。

「ねえ、暎治…私にもかまってよぉ」

机に突っ伏している暎治を私は揺さぶった。

暎治は、顔をあげないまま机に手をついている私の手を探し、見つけるとその手に自分の手を重ねた。

私はため息をつきながらもこれも暎治なりの愛情表現なの言い聞かせて、しばらくは暎治のそばにいた。

授業の始まりをつげるチャイム。

「暎治、今日一緒に帰ろ？部活休みでしょ？」

チャイムと同時に、私は暎治と一緒に帰ることを約束した。

*

私は、学校から少し先のバス停で部活帰りの暎治を待っていた。
今日は少し雨が降っている。

だが、暎治のことを考えていて傘をさすのも忘れていた。

「よっ、いつき」

しばらくして暎治が到着し、私の頭に傘をさした。

「傘ささないと風邪ひくよ?。」

優しくニコツと微笑む彼
その笑顔がすごく愛しい。

暎治とする何気ない会話が私にとってはすごく幸せで大切な時間だった。

暎治……………

…………… 貴方にとって私は、どんな存在ですか？

そんな幸せはすぐに消される。

「なん…で？」

私は必死に暎治にすがりついた。

「だから、友達に戻ろうって」

「訳わかんない！私のこと嫌いになったの？」

「ちげえよ」

「好きな人…出来たの？」「出来てないけど」

「じゃあ、なんで…？」

最近はずルズルと引きずりながらも、それなりに仲良くやってきた。

だって、暎治は私を抱いた。キスもした。愛だって確かめあった。

そのあと暎治に電話をかけた。

だが一向に出る気配はない。

私は、もう一度暎治の電話番号へ発信した。

《おかけになった電話番号は、現在、電波の届かないところにある
か、電源が―――》

ピッ

この後はどうなるかはわかってる。

電波の届かないところにいるはずがなかつ。

私は暗く、寒い夜空の下で泣いた。

私は、そんな興奮状態のまま、いつのまにか、

岡野に電話をかけていた。

『なっ、ちよっ……どうした！？』

「暎治が…暎治が」

泣いているせいで、自分でもなんて言っているのかわからない。
とにかく、支離滅裂ではあったが伝えることは全て岡野に伝えた。

助けてほしかった。

暎治を、叱ってほしかった。

なのに、誰も彼のことを叱らない。

彼のしたことは、悪いことではないの？

誰も、ム力つくとは思わないの？

あんな覚悟決めたようなこと言ったくせに、他の女の子にイチヤイチャして私には見向きもしない。

私の体を道具のように扱って、完全に今の私は暎治の性欲処理の道具である。

こんな人を、皆は放っておけるっていうの？

結局、岡野は私の力になってくれなかった。

唯一の相談相手である彼から、希望の光となる言葉はなかった。

*

ある休日、私は無理を言っ彼をいつも待ち合わせしていた駅に呼び出した。

もう顔も見たくないと言うような断りの言葉が続いたものの、私の必死な呼び掛けに彼も折れたようだった。

何分かして、部活ジャージに身を包んだ暎治がゆっくりと私に近づいていく。

会ってからすぐに人気の少ない場所へ移動した。

私は暎治との思い出をいっぱい話した。

「やっぱり私は嫌だよ」

「……………」

「暎治、あなたにとって、私はなに？」

「特別な存在」

「じゃあ、なんで？」

「もう疲れたんだよ。重いんだよ」

「ごめん……気づいてあげられなくてごめん。私、また暎治の大好きな私に戻るから、置いていかないで。お願いだから……………」

「もうお前に恋愛感情はない」

「……えっ、そ、そんな」

一番ショックな言葉。

わからなくて、辛くて私はその場で泣き崩れた。

「お、おい。泣くなって」

少し慌てた様子を見せた暎治。

しばらく沈黙が続き、やがて………

「いつき、泣かないで。立って？」

私は、暎治に導かれた。

そして

暎治は私を力強く抱きしめた。

「ごめん……………」

暎治はそれだけつぶやいた。

「優しくするなら、ずっとそばにいてよ」

だが暎治は首を縦にふらなかった。

私は泣いた。

暎治の胸でたくさん泣いた。

じゃあ、俺帰るから、と言って私に背を向けた。

暎治……………

私は小さく呼んでみたが、暎治が再び振り向いてくれることはなかった。

*

暎治と別れて数日。

気付けばもう定期試験が始まっていた。
だが、この数日、暎治のことが気になり、試験勉強がほとんど出来ないまま当日を迎えてしまった。

最悪だった。

おかげで成績は駄々下がり。

これではいけないと思い、私は図書室で勉強することにした。

図書室に行くと何人か勉強をしていた。

そこで、見覚えのある人がその集団に混ざって勉強していた。

「岡野君？」

私が名前を呼ぶと、彼は顔を上げる。

「おお、よっ！」

最初は驚いたような仕草をし、その後はいつものように挨拶をする彼。

「奥の机、行かない？」

私たちは、誰もいない一番奥の机へ移動した。
誰からも邪魔されない、2人っきりの空間。

私は、緊張しているのか、若干手のひらが汗ばんでいる。

かなりの沈黙が余計私を焦らせる。

そして、その静けさが私の過去を蘇らせる苦の時間となる。

私はずっと暎治のことを考えていた。

私は携帯を取り出す。

アドレス帳から暎治のメールアドレスを探だし、静かに文字のボタンを打った。

《ねえ、暎治…私と出会って後悔してる?》

今一番聞きたいこと。

やっぱり、過去を振り返ってほしいのだ。

《後悔してる。》

だが、その返信は予想とは真逆だった。

私は涙ながらに

《なんで?》と送る。

《嘘ついてたから》

《嘘って?》

《俺、本当はお前のこと、好きじゃなかった》

私は固まったまま、メールを見つめ続けた。
シヨックのせいか手は震え、心臓もバクバクしている。私の頬を伝う水滴は次第に止まらなくなっていく。

「与瀬？」

岡野も私の様子に気付いたのか、心配そうに私の顔を覗きこむ。

《どういうこと？わからないよ。あんた、無責任だよ！私の過去を知っておきながら、自分の欲を満たすだけに私を道具のように扱って！！嫌だよ…》

私には怒りしかなかった。なのに、涙が出るのは何故だろう。

《愛人ならいいよ》

暎治からは決して聞きたくなかった。

《愛人…？》

意味はわかっている。
だが、なんだかわからない。

《二番目ってことだよ》

《一番はなんなのよ》

《彼女》

彼…女……………？

《彼女がいるの？》

《今はいないけど、まあそのうち》

《私は…？》

《好きじゃないから。愛人として俺の身体毎日癒してくれるならばにいてやるよ》

信じられない。

私は所詮、彼の玩具。

私は暎治会ったんびに、汚されていたんだ。

悔しくて、苦しくて、私は涙を止めることが出来なくなつた。

「おい、与瀬どうした!？」

私は岡野の声で我に返った。

私を見つめる岡野はどこか寂しげで、なぜか余計涙が溢れてしまう。

ガバッ

私は岡野に飛び付いた。
そして、いっぱいいっぱい泣いた。

岡野を抱き締める私の腕は次第に強さを増していく。

「暎治は、私をだました。体だけの付き合いなら、いいって……辛
いよ、悔しいよ……!!」

岡野はあまりの出来事に驚いたようだった。
だが、やがて、岡野の腕が私の体を包み込む。

「泣きたいときにはおもいつきり泣け」

岡野の温もりが感じられる。

私はしばらくその身を預けた。

「ちくしょ…稲山のやつ…」

彼は、チツと舌打ちをし、よりいっそう強く抱き締めた。

暎治に対して怒りを持ってくれたのは岡野が初めてだった。

私は嬉しかった。

この人なら、暎治にガツンと叱ってくれるんじゃないかと……

……

ようやく落ち着いた私は、今日のところは家に帰ることにした。

岡野と2人で……

*

「ん……………」

目が覚めると、そこは暗闇に包まれていた。

家に帰った私は、泣きつかれてそのまま寝てしまったのだろう。

私は時計を見た。

「夜中の3時……か……」

私は体を起こした。

そして携帯を確認すると新着メールが一件入っていた。

「誰からだろ？」

私はなんの迷いもなくメールの受信者を確認する。

暎治……………

その正体は暎治だった。

予想外の展開にしばらく固まっていたが、我に返ってすばやく内容を調べる。

《明日会える？》

しかも予想外の内容。

胸のドキドキが止まらない。

私はすぐさま返信をした。

するとさらに予想外。

すぐに返信が返ってきたのだ。

《じゃあ、今日の3時にいつもの駅の近くのマックで》

また暎治に会える。

そう思うと嬉しさは止まらず残りの時間が寝れる気がしない。

《なにしに行くの？》

調子に乗ってこんなこと聞かなきゃよかった、と思うのはその返信が来てからだった。

《やりたいから》

やる？なにを？

暎治は、私のなんだというの？

私はショックだった。

暎治は本当に私を性欲処理の道具としか見ていない。

悔しくて私は歯を食い縛る。

でも、理由はどうであれ、彼は会いたいと言ってくれた。会ってからだって、そのあとの運命はいくらだって変えられる。

私は、暎治の幸せだけを想ってる。だから、暎治の言うことはなんでも聞こう。

そう思っているうちに、朝を迎えてしまい、私は早めに家を出た。

*

今日も特に暎治と話すことはなく授業は午前中で終了。

待ち合わせ時間までまだ時間があるので、図書室で勉強をしている

ことにした。

だが、退屈である。

私は落ち着かなくなつて1時間早く学校を出た。

駅の周辺で暇を潰して暎治を待つことにした。

だが、外に出てみれば、そこは極寒の雨の日……

3時間ほど待つて、暎治はゆつくりと歩いてやってきた。待ち合わせ時間に1時間も遅れて来ると言うのに。
さらに気温はかなり低い。私の体は寒さに震え、手も凍ったように動かない。

「ゴメン、部活が予想以上に伸びて………寒いかな?」

「ううん、こんなたいしたことないよ」

暎治の優しさについて負けてしまっている私は、かなり重症だと思う。

「今なら、手繋いでもいいよ?」

暎治はそう言って私に手を差し伸べる。

「なにそれ」

「いや、2人つきりしているときは、手繋いでやるよ」

私は嬉しかった。

暎治は私のところへ戻ってきた、と……………

私は暎治と雑談を楽しみながら、近くのカラオケボックスに入った。

部屋のドアを開けると、そこはすごく暗闇に包まれている。

私達はとりあえず並んで座った。

聞こえてくるのは目の前のテレビの音だけ。

私達は見つめあった。

すると、暎治は私の肩に手を伸ばし、顔が近づいていく。

「——っや——!」

だが、反射的に私は、暎治とのキスを拒んだ。

「嫌？」

「いや、そうじゃなくて…私のこと好きでもないのにキスしてほしくない」

「うーん…なんていうか、やっぱりまたこうして2人でいると、やっぱり俺、いつきの事好きなんだなあって……」

「……………」

「俺と、戻りたい？」

私は迷いもなく、首をコクリと縦にふった。

「じゃあ、俺にお願いしてよ。」

「え？」

「ラストチャンス。ほら、戻りたいときはなんていうの？」

やっぱり、彼は私を試してる。

だが、この際体の付き合いになったっていい。

2人でいられるなら、私はどうなっても構わない。

しばらく考えた末、ようやく口にした第一声。

「やっぱり私、暎治が好きだよ。私と……付き合ってくださいませんか？」

「よし、よく言ったぞ！」

そういつと私を強く抱きしめ、口付けをする。

早くも暎治の舌が私を中から乱していく。

狭い部屋の小さなソファーでお互い重なり合い、触れていく。

そして、私は、暎治のモノを私の口で愛撫する。

チカッ！

「んっ！？」

その最中に突如現れた謎の光。

目だけで探してみると、それは暎治の携帯だとわかる。

あわてて口を外す私。

「暎治…なにを……」

「いや、ハメ撮り。前にしていいって言ったじゃん」

まあ、言ってみたことはあるけど、いざやってみるとかなり恥ずかしい。

「よろしく頼むよ」

不適な笑みを浮かべて私の口に自身を入れる暎治。

奥まで入って窒息してしまいそう。

さらに、ビデオに撮られていると思うと、余計私を興奮させ、身体を熱くさせる。

ん、ん、と息を切らしながら愛撫を続ける私。

暎治の腰の動きはだんだん速さを増し、やがて、絶頂の波が押し寄せる。

鈍い水音が鳴り響き、ついにその絶頂に達する。

「んんっ——！！！！」

真っ直ぐに私の口の中へ侵入するドロドロと濁った愛液。

私はあまりの多さにびっくりして半分以上口からこぼしてしまった。

暎治が心配そうに見つめている中、私は口に入っている残りの愛液を飲み込んだ。

暎治は一瞬驚いたように見えたがすぐに笑顔を取り戻し、私をぎゅっと抱き締めた。

そして私を離すとそのまま暎治は歌ってしまった。

嫌だ、私を抱いて。

愛してる証を私につけてよ……………

「暎治…私のナカに入れてよ」

言ったあとから恥ずかしさが込み上げてくる。

暎治はえく、と苦い顔をしながらもズボンのファスナーをおろし、私を対面の状態で膝の上に座らせた。

奥に勢いよく突き付けてくる凶器は私を快樂の底へと引きずり落とす。

腰の動きは強さを増し、快楽で体の力は抜けながらも必見に暎治にしがみつく私。

ブルルルルル……………

突然ルーム電話が鳴り響き、一瞬で固まる私たち。

電話に出ると、それは5分前を知らせるものだった。

「暎治……………」

「一気にいくぞ、後ろむけ」

そう言って私は目の前にある壁に手をついた。

「っんう…！」

なんの予告もなしにその凶器は容赦なく私を奥から突き上げる。

苦しい、だけど、今は暎治の温もりを感じる。

だから気持ちいい。

私は、次こそはと願った。

暎治と幸せになるように……

＊

私は、家に帰りホッと一安心した。

今度は、ちゃんと暎治を信じられるかな。
いや、信じるんだ。

私は携帯をパカッと開いた。

新着メール一件……

暎治からだった。

私はつかつかしながらそのメールを開いた。

だが、そのメールは私の予想を遥かに越えたメール。

《やっぱり、別れよう》

私は目をこすった。

別れる、という言葉の意味を何度も何度も考えた。

なんで？

だってさっきは好きだって……………

嫌だよ。離れていかないでよ。お願い、お願いだから！！

結局は私の体目当てだったのか。

所詮は愛人——性欲処理の道具——だったわけか。

私も何故ちよっとした優しさにコロッと転がってしまうのだろうか。

自分で自分の首を締めていると思うと、なんだか悔しくて苦しくて辛い。

でも、私は知っている。

暎治は本当に優しい。

私が辛い経験をしていることを知って、私のために覚悟を決めてくれた……………んじゃなかったの？

もう一度問おう。

あなたにとって、私はなに？

私は待つてる。

暎治がまた笑顔で私のそばに来てくれることを。

ずっと待つてるから

《過去は、いつかは消えるんだよ》

暎治はこう言う。

じゃあ、過去の思い出は暎治にとってはただのゴミだと？
過去を忘れちゃえば、あとはそれで終わりなの？

違うよね。

あなたが作った過去によって、傷ついて苦しんでる人もいるんだよ。

あなたはそれを考えたことはありませんか？

私は、暎治との思い出、いつまでも大事にするよ？

帰ってきてよ……………

それから、私は暎治とは一切連絡をとらなくなった。
もう4ヶ月が過ぎたまだまだ寒い冬のこと。

私の誕生日も、クリスマスもあつというまにすぎた。

だが、今でも変わらないこと……………

私は未だに暎治の帰りを待っている。

また愛してくれる日がくるまで……………

そんなこんなで月日は流れ続け、いつの間にか、周りは修学旅行シーズンでバタバタしていた。

20話：修学旅行？

2月の雪の日。

私はため息をつきながら、荷物がたくさん入ったキャリーバッグを転がして駅のホームを歩いていった。

今日から修学旅行なのである。

行き先はシンガポール。

4泊6日というハードスケジュール。

まだ空港についてもいないというのに、さっそく“帰りたい”とつぶやく。

「あ、岡野君！！」

私は待ち合わせしていた岡野を見つけ、会うことができた。

そのあと佐原と合流し、空港行きの電車へ急いだ。

「おい、与瀬！」

突如私の名前を呼ばれあわてて振り返る。

そこには、私の大の親友である『落井ちか』

話しの中ではあまりでてこないが、ここでは重要人物なのでおさえ

ておこう。

ちかは、母親と一緒に手をブンブン振った。

ちかは、最高にいい奴であり、私と2人そろえばたちまち最強コンビになる。

ついでなので、私達はちかと一緒に空港に向かうことにした。

電車の中では、それはそれは盛り上がりまして空港まであっという間だった。

電車を降りて私は進んでいく。

パスポートを空港に入る前に確認され、私は一番最初にゲートを通った。

そして、私は、ちか達をゲート前で待とうと振り返ったとき………

そこには、同じようにパスポートの確認を受ける、稲山暎治の姿があった。

私の大事な人、愛しい人。

目の前にいるのに届かない存在。私は胸がつまりそうだった。

私は“おはよう”と声をかけてみる。

“うつす”と帰ってくるいつもと変わらない返事。

でも私達の関係は、どこから変わってしまったのだろう。

別れてから3ヶ月。

暎治は今を、どんな気持ちで過ごしているのだろう。

そんなことを考えてるうちに、どんどん離れてしまふ暎治との距離。

私は、その後ろ姿に全力で抱きつきたくなった。

*

飛行機に揺られて8時間。やっとのことでシンガポールについた。

いざ外に出てみれば、ムワツと暑く、湿気が半端じゃない。寒い真冬の日本から来た私達。こんな気温が想像出来ていなかったのか、一斉に上着を脱いでいく。私も同じ。脱いだダウンをキャリアバッグにしまいこんだ。

これから、シンガポールからマレーシアへ移動する。その際の入国審査やらなんやらがとてもめんどくさい。

私は、ちかと一緒に並んで審査を待った。

私は辺りを見回した。

「！！」

だが、私はものすごいスピードで目をそらした。

体を刷り寄せ、笑顔で女の子に話しかける暎治の姿があったからだ。

彼はいつもそう、誰か気になる女の子がいれば、自分の体をその子にくつつける習性があった。

私のときだってそうだった。やたら体をくつつけたがる。

とことん最低な男だと思う。だがなぜこんなことになってまで、私は彼を愛しているのか自分でもわからなくなってきた。

私はさっさと審査を受けてその場を立ち去った。

こんなことがずっと続いてしまうのか。

そう思うとかなり鬱になる。

私は確信した。

この修学旅行は、最悪な旅行になる……………と。

だが、せつかくの修学旅行だ。

最悪になんかさせたくない。放っておけばいい。

私は私で楽しくやろう。この1週間は暎治のことは一切考えずに。

そう考えてるうちにいつの間にかホテルについていた。

さて、早くシャワーが浴びたい。

私は岡野と佐原に「おやすみ」と告げ、なるべく暎治を視界に入れないように、ちかを引っ張って部屋へ向かった。

私とちかの2人は四階の部屋である。
2人部屋だ。

ユニットバスつきで大きなベッド。

なかなかいい部屋である。

今は夜の10時。

私は先にシャワーを浴びることにした。

さて、明日の予定はなんだったけかな？

*

今日はマレーシアの村訪問！！

意外と田舎じみているのかな、と思いきやそうでもなく、緑豊かな珍しい建造物がある素敵なところ。

私は好きである。

住みたいランキングの中に入るかもしれない。

ご飯も美味しく、かなり好きになった。

ただ、どこも味付けが薄いんだよねあ

まあ、そんなことはどうでもよくて、そんなこんなで楽しい1日になった。

ホテルに帰ってから、就寝時刻になってもなかなか寝付けず、ちかが持ってきたマイケル・ジャクソンの人形で遊ぶのだった。

さて、明日私とちかはマレーシアの学校訪問でスピーチがある。しかもマレー語で。

緊張せずにうまくスピーチ出来るか？

大丈夫！

ここは演劇魂で成功させてやるさ！！

*

朝！！

今日は学校訪問！

さあ、気合い入れて行くぞ！

……………と、ちかと騒いでいるのは、朝の5：00時のこと。

早く起きすぎてしまった。一通りホテル内をぐるぐる廻ってきたがそれでもまだ早い。

私達は仕方なくコーヒープレイクすることにした。

それでも早く、私達は食堂の前でうろうろしていた。それを見かねたのか、先生は、食事の時間よりも少し早く、私達を食堂の中へ通してくれた。

うん、なんだか今日は気分がいい。

さあ、そんなこんなでスピーチ大成功！

……………えっ？

修学旅行のこと、もっと詳しく話しろって？全く、せっかちなあ。皆さん、お忘れですか？

このお話は修学旅行がメインではないでしょう。それに、修学旅行1日1日を詳しく説明してたら長くなるし、私の体力も持ちませんよ。

さて、今日はシンガポールへ移動だ。

また出国審査やら入国審査やらめんどくさい。

なるべく暎治を視界から避けて先へと急ぐ。
やっぱり、たまに見える暎治の楽しそうな顔を見るとぐさりと胸を刺される。

痛くて苦しくて寂しい。

いつまで続くのか。早く終わらせたいたい。

私は焦るばかりで、だんだん心も体もボロボロになっていった。

だが、やっぱりそんなことに振り回されたくはない。

バスに揺られて30分。

ホテルに行く前に今夜はナイトサファリであらゆる珍獣を見る。

そこで食事も済ませる予定だった。

だが、私はなぜか食べる気にはとてもなれなかった。

もちろん疲れもある。

だが、暎治による精神的な疲れはもっとある。

それは、じわじわと私の身体を蝕んでいた。

水すら口に出来ない。

顔色の悪さに先生や周りの生徒が驚いた。

だが、とても相談出来るような内容ではない。

恋愛に悩んでいるといえば、誰だって笑うだろう。

結局、熱中症だろうということで話は終わった。

まあ、ナイトサファリはそれなりに楽しんだ。

だが、大きな重荷を抱えながら過ごすのはかなり辛いものであった。
無理矢理笑顔を作るのも次第に馬鹿馬鹿しくなり苦しくなった。

とにかく、早くホテルに………
…いや、家に帰りたい。

*

ようやくホテル到着。

なんと70階建ての超高級ホテル!!

私とちかは、46階。
そこそこ高い位置。

———ていうか、変なところに金を使っんじゃない!!

嬉しいような悲しいような不思議な感情はあったが、まあ、ベッド
が気持ち良いから良しとしよう。

さて、明日は………

ユニバーサル・スタジオ・シンガポールだぁ!!

つい最近出来た遊園地で、この遊園地に行くのは私達が初めてである。

明日はきっと楽しい1日になる!

明日は全てを忘れて楽しもう！

そう、ちかと浮かれている私の背後に私の幸せを邪魔をするかのよう
に、悪魔が潜んでいるなんて………その時は思いもしなかつ
た。

21話：修学旅行？

「今日の予定は？」

「ラッフルズの像見てからUSSだよ。」
ユニバーサル・スタジオ・シンガポール

「ラッフルズかぁ、こんなときにマライオン見れないだなんてね」
「工事中だもんね」

そう。今はマライオンは工事中で公開していないということで、
急遽『ラッフルズ』という人物像を見ることになったのだ。

さて、ここでもお約束。

ちかとなんか話をしながらコーヒを飲んでいるのは、朝の5時
30分のこと……………。

朝食の時間まで1時間半もある。

「ちか、下なにかあるみたいだし、探検してみないか？」
「そうだな。行ってみるか。」

2人して「どっこいしょ」と立ち上がり、静かな廊下を歩いていっ
た。

なんといっても、ここは46階。

とにかくエレベーターがくるのに時間がかかる。
来たかと思つてそれに乗れば、一気に下へ下がる勢いでかなり耳が
痛くなる。

それに耐えながら、私たちは集合場所であるロビーの椅子に座った。

すると、何人かうちの学校の生徒がいた。

そのなかに岡野もいる。

「あれ？岡野君、おはよう！」

「よっす！」

「早いね。どうしたの？」

「部活だよ」

「部活！？修学旅行なのに部活やるの？頭おかしいでしょ！？」

「あはは、だよな」

「部活頑張つてね」

「おう、サンキュー」

そういつて集団の中に紛れて外にでていつてしまった。

私たちはというと……まだ時間があるので、ソファアでお話しながら待つのであった。

*

朝食を食べ終え、私とちかはまたしても早くロビーに来てしまった。
だが今回は１番ではない。

1番に来ていたのは、岡野と岡野のペアの人。

「早いね」

「ん、ちよつと早く来すぎたかも」

そういつて笑う。

さあ、今日は楽しい1日にするぞ!!

バスに乗り込み、やがてバスは出発。

感動的だった。

シンガポールの街並みはとても綺麗。

東京には失礼だが、東京よりクオリティが高いのではと思うくらい。

だが、そんな夢のような風景とは反対に、バスガイドの指差す方向には.....檻に入れられたマライオンの姿があったのだった。

さてさて、皆が楽しみにしていた……………ラッフルズの像に到着。
そしてとりあえず記念撮影。

記念撮影のあとは、バスに戻りたいところだが、バスが違う場所に
移動したということで、少し歩くことになった。

目の前に広がるのは大きく美しく輝く川。東京以上の風景。

……………そして

私の愛する人。

一応、私たちは近い距離を保ちながら歩いていた。
手の届きそうな距離。

はしゃぐ彼を見てときめいてしまう。

彼までもが輝いて見えた。

距離的にも、意識的にも離れていってしまう彼。

前にこんなことがあった。

そう、それは、私と暎治が付き合う前に行った、大きなショッピングモールでのことである。

皆さん、覚えているだろうか。

そこで、暎治と食事をしていたとき

『修学旅行、今年はバスケット部行けるようになったんだよ』

『え？毎年行けてないの？』

『ああ。大会とかぶるからさ』

『へえ、ドンマイじゃん。でもよかったね。行けるようになって』

『ホントだよ』

『修学旅行、班行動あるのかね？』

『あるんじゃないか？』

『一緒がいいね』

『そうだな。男女混合、自由に決めていいなら、俺と与瀬と岡野と佐原は決まりだな。』

『ちかも入れようよ。私仲良しだし』

『まあ、男女混合だったらな』

『約束よ？』

『ああ。』

「こんなことになるなら、バス

ヶ部大会と重なって来れなくなればよかったのに」

私はボソッとつぶやいた。

今思うと、男女混合の班じゃなくてよかったと思う。

だが、私には切なさしか残らなかった。

*

「わぁ！ついたね！」

ついに『ユニバーサル・スタジオ・シンガポール』に到着！

デイズニールランドとはまた違う感覚。

私は感動した。

「ちか、岡野君や佐原君も一緒にいいかな？」

「えー、まあ別にいいけど。」

「ありがとう！」

私は岡野と佐原を引っ張って入り口を通った。

本来だったら、ここにいていいはずの彼。

だが、気をつかってくれたのか、佐原は暎治を引っ張って連れてきてくれた。

これで4人がそろった。

だが、全然嬉しくないのはなぜだろう。

暎治とはなんの会話もないまま、私はちかの腕に自分の腕を絡めて初っぱなジェットコースターに乗ったのだった。

感じたことのないスリルに足がふらついてしまう私。初っぱなからハードすぎたか？

それでも、私とちかのテンションは高まるばかり。私たちは第2のスリル系に乗ろうとしていた。

「わりい、俺こっち行くから。」

だが、暎治は別の友達と違う方向へ行ってしまった。背をむける彼。遠ざかる彼。追いかけてくても追いかけられない。

「じゃあ、これ乗るか!」

ちかの掛け声でやっと我に返った私は、再びテンション高く、私とちかは恋人同士のように、腕を組んで前に進むのであった。

「あれ？岡野君、顔色悪いよ？大丈夫？」

「ん、ああ。ちょっと頭痛くて」

「それ多分熱中症だよ」

「ちようどレストランあるよ。ちょっと休憩しよっか」

私たちは岡野を支えながら目の前にあるレストランへ向かった。

そう。そこからだった。

人生最大の『悲劇』の始まりは

私たちは、ジュースを飲みながら、雑談をしていた。

「岡野君、具合大丈夫？」

「ん、だいぶよくなった」

「先生呼ぼつか？」

「ああ、いや、いい。本当に大丈夫だから」

人一倍強がりで無茶ばかりな岡野。

それはシンガポールに来ようが変わらないこと。

「なあ、これ見て。昨日の稲山のテンション」

ふいに、佐原はカメラの中のムービーを見せてきた。どうやら稲山と佐原は同じ部屋だったようだ。

そこには、歌を歌いながら踊る、暎治の姿があった。

輝いて見えた。

私が最も愛する人。

だが、こんなときに、そんなのを見せられたらたまったもんじゃない。

私には切なさしかない。

つい目を背けてしまう。

それに気が付いたのか佐原は「ごめん」と言ってあわててカメラをしまう。

しばらく沈黙が続く。

私は耐えきれなくなりそうで、「さて、そろそろ出ようか」と言おうとした時……………

「ごめん。お前、今こんなにも苦しんでるのに、こんなの見せちゃまって」

私は止まってしまった。

私は耐えられなくなった。

私は注文したコーラを一口飲む。
そして置いた。

「私、まだ暎治のこと、好きだよ。」

私にもわかった。
一瞬で空気が凍ったのを。
空気が止まるってこんな感じなんだ。

「ああ、私先に外に出てもいいかなあ？」
「俺も、先に出るわ」

2人はなにかを察したのか、さつさと店を出てしまった。
私は気まずくなって2人を引き止めて一緒に行きたかったが、なぜか足が震えて動かない。

気付けば私と佐原の2人だけ。

数秒の沈黙が続き、先に口を開いたのは佐原だった。

「あんまり、あいつには言うなって言われてたんだけどさあ、あいつがお前と別れたのはお前のためを思ってたことなんだよ」
「私のため？」

「お前を成長させるために――」

「じゃあ、言うよ！今の私を見てどう思う！？」

「……………」

「今の私にはなんの成長もない。もし、暎治の言っていることが本当だとしても、暎治のわがままにしたがって付き合ったのに、勝手に捨てられた私の気持ちにもなってみなよ？私にはなんの得もなく、もちろん成長なんかない。むしろ、どんどん弱くなっていく。」

「それは、見ててわかるよ。」

「私には、暎治が必要なんだよ」

「稲山が全てじゃないだろ？男は稲山だけじゃないだろ？」

「私は、暎治が戻ってくるまで待ってる。」

「残念ながら稲山は、もう新しい彼女いるよ」

凍りついたように動かなくなる私の体。

それは次第に震えに変わる。

訳がわからなかった。

暎治が私以外の女を愛すだなんて、信じたくなかった。

「俺じゃあ、ダメかな？」

再び止まる。

つい、「えっ？」と聞き返してしまう。

「俺と、付き合ってくんないかな？」

付き合う？

私は頭が真っ白になった。

22話：修学旅行？

私は、その場を動くことができず、佐原との会話もプツリと切れてしまった。

さすがの私でも、このショックは隠しきれなかった。なにを言ってるのかわからない。今にも泣き出してしまいそうだった。

なによりもショックだったのは、佐原の裏切り行為だった。

うすうす気付いてはいたが、佐原は、私と暎治の幸せを良いことだとは思っていなかった。

私と暎治が別れたことを良いことに、私との交際を迫った佐原。私はとてもじゃないけど佐原と付き合う気にはなれなかった。

それに、私はまだ暎治のことを想ってるから……………

私は震えながらも、ようやく口を開くことが出来た。

「私は…………暎治をずっと想ってたいから。佐原君とは付き合えない。」

佐原は固まったように見えた。

まあ、そりゃフラれてショックだろう。

でも私はもっと傷ついてる。佐原の気持ちなんか知ったことじゃない。

それに、岡野やちかはこんな展開になることを知って、私と佐原を2人つきりにしたのだろうか。

あの2人だけは…………私の味方だと思っていたのに…………。

私は、見事に全員に裏切られた気がしてならなかった。

佐原と店を出ると、岡野とちかが待っていた。

「う、ごめん」

なんとも気まずかった。

誰も口を開かず、無言のまま時間だけが過ぎていく。

佐原は、みんなと少し離れて泣いているように見えた。

私に重たいなにかがのしかかる。

みんな.....私のせいなんだ.....

「ねえ、うち別のところ行ってもいい？嫌なんだけどこの空気。」

長い沈黙を最初に破ったのは、ちかだった。

だが、決して良い言葉ではない。

そうだ、私のせいでこんなことになってるんだ。

「違う。私がいなくなればいいだけの話。ちかは悪くないよ。」

そういつて私はちか達のもとを去った。

辛かった。

こんなことになるなんて.....

しかも、逃げるような真似して

「逃げる.....？」

私は足を止めた。

逃げちゃった.....私、辛いことから逃げちゃった.....

卑怯な自分に絶望して、近くにあったベンチに座り込む。

人の流れが遅く感じた。

周りの笑い声が、全部私に突き刺さってくるようで怖い。

私は自分の震える体を抱き締めた。

――「与瀬」

「!？」

私は、顔を上げた。

そこには優しく微笑みながらゆっくりと私に歩みよる岡野の姿があった。

「岡野君……………」

「急に飛び出して行くからびっくりしちゃった」

「ごめん」

「とにかく、みんなのところに帰ろう。」

「私なんかが、戻っていいの？」

「んゝ、俺は、戻ってきてほしいな」

「岡野君……………」

「ほら、行くよ？」

私は岡野に引つ張られながら元来た道を歩く。

みんなのところには戻ったものの、佐原はまだ距離を置いているし、ちかはその場にはいない。

完全に空気を壊してしまった。

私にあるのは、罪悪感だけ……………

この空気が怖い。

私は静かにしゃがみこむ。

やがて、ちかが帰ってきた。

別の子と行動してたみたいだ。

「ごめん」と言ってみたが、微妙な反応である。

「とりあえず、遊ぼうか」

私たちは微妙な空気のまま近くの乗り物に乗りに入った。

「あれ？稲山は？」

突如、声をかけられその方向へ顔を向ける。

「いねえよ？」

それに対して反応したのは岡野だった。

その人は、暎治と同じバスケット部の友達である。

私は顔を上げないまま、その場に立ち尽くしていた。

「稲山、島田ってやつと付き合ってるらしいぜ」

わざと大きな声で、私に聞こえるように言われたその一言は、とても重く、痛かった。

肩が震え、いつのまにか拳に力が入る。

悲しすぎた。

辛かった。

死にたいよ……………

結局、ちかは私たちを離れ、他の友達のところへ行ってしまった。

無理もない。

今私は、岡野のとなりで大泣きしているのだから。

もう笑顔なんて言ってる場合じゃなかった。

ずっと溜め込んでいたものが一気に爆発したのだった。

私は岡野と一緒にユニバーサル・スタジオ・シンガポールを出て、ずっと落ち込んでいた。

23話：修学旅行？

やがて、全員が戻り私は1人でとぼとぼとみんなの後ろからついていった。

「与瀬、どうした？」

私の異変に気付いたのか、担任の岩井先生が心配そうに私を見つめた。

岩井先生は、10年以上付き合ってきた男性と最近結婚したばかりの新婚さんである。

性格は気が強い意思の強い女性だが、見た目はとても綺麗な顔立ちで、学校の中でも一番綺麗な先生として生徒から慕われている。

だが、今は返事を返す気力もなく、「ちょっといろいろあって」と適当に流した。

岩井先生もそれ以上は聞いて来なかった。

バスの席は、ちかと隣同士だが、お互いに一切目さえ合わせなかつ

た。

夕食はホテル外で済ませる予定だが、当然ながら食べ物が口に入る気配はなく、みんなとは別の場所で1人ボツと座っていた。

他の先生も徐々に私の異変に気付き始め、「大丈夫？」と言われては「大丈夫です」と答える。

正直迷惑である。
放っておいてほしかった。

「与瀬、なにか食べなきゃ。フルーツ食べる？」
「すいません。今は何も食べたくないの」

岩井先生は私の隣に座りこんだ。

「与瀬が落ち込んでるのは、落井と喧嘩したから？」
「それもある。」
「じゃあ、他は？」

「――稲山が……隣にいないから」

その瞬間、岩井先生が固まった。

岩井先生は私と稲山と付き合っていたことも知っていて、私たちのペアを一番応援してくれた。

『2人ともしっかりしてるから先生はとても嬉しいです。特に稲山は先生のイチオシです。お互いに成長できるお付き合いなら先生はいつでも応援しますよ。』
前にこんなことを言っていた。

きつと私たちが別れたこともすでに知っている。

私はとりあえず、今日あった出来事を話した。
岡野が倒れたこと、佐原から告白されたこと、稲山が別の彼女がいたということを知ったこと、ちかが離れていったこと。

――みんなに裏切られたこと……………

先生はうなずきながら聞いた。

「今日、与瀬の部屋に行きます。その時にお話しましょう。」

そういつて先生は中へ入ってしまった。

中はすごく盛り上がってる様子で、誕生日パーティーをしているようだった。

*

ようやくホテルに着き、私はちかと2人、無言で部屋に行った。

「与瀬、先にお風呂入ってもいいよ」

「そう？じゃあ、先に入るね」

いざ会話をしてみれば普通だったが、やっぱり私たちの前には薄い壁がある。

そんなことを感じながら私はお風呂場の扉を開けた。

「キャッ」

鏡を見た瞬間、そこに映っていたのは、青白く、細くなった私の姿があった。

今思えば3日も食べていない。

私は、いつたいなにをしたいのだろうか。

私が求めているものはなんだろうか。

なにもかもがわからなくなった。

私はお風呂から上がり、タオルで頭を拭いていた。

「ちか、次お風呂いいよ」
「うん」

私は荷物の整理を始めた。
なにかを誤魔化すかのように。

「なあ、与瀬」
「なに？」
「ちよつと話したいことがあつて……………」

そのとき私は、なにも聞かない方が幸せだと思った。

「実は、これ、仕組んであつたんだよ」

……………は？

「うちもよくわかんないけど、稲山と話し合ったらしいよ。」

「暎治が、手をかした？」

「まあ、あのタイミングでコクるとは思ってた、ってあいつも言ってたけど。」

暎治が……………佐原に手を……………。

そつだ、もう私は誰のものでもない。

別に私が他の人と付き合おうが暎治には関係なくなってしまったんだ。

でも……………私の気持ちも知らないで、ひどいよ……………。

—————コンコン

「与瀬、落井入るよ」

岩井先生だ。

他の部屋の点呼が全て終わったのだろう。

ちかは、そつと部屋の扉を開けた。
しかし私はそれどころじゃない。

裏切られたショックや悲しみが一気に込み上げてくる。

コンッ

「?」

「与瀬、気持ちはわかるけど、ご飯だけは食べなさい。」

そう言って、カップに入ったスープと、パンを置いた。

「せっかくの修学旅行なのに、こんなの嫌でしょう?」

先生はクスクスと笑いながら部屋の椅子に座った。

「与瀬はさあ、どうしたいの?」

「仲直りしたい」

「稲山と?」

私はコクリとうなずいた。

「私は、前の彼にも裏切られてとても悲しくて、辛かった。人を信じるのが恐くなった。……でも、暎治は、そんな私をいつも励ましてくれて、私もいつの間にかそんな暎治を好きになっていったんだ。」

「稲山は、そういう優しいところあるからね」

「うん。暎治は“俺がお前を守っていく。絶対にお前を離さない”って言うてくれたの。私の辛くて、暗い過去を受け入れてくれたの

は、彼が最初だったの。私のために、相当の覚悟を決めてくれるんだ、って思ってたのに……………」

「やっぱり、お互いの価値観が違ふことはあるのよ。それは、相性が悪かったってこと。……………」私だって、そうだったんだから……………」

「……………」えっ?」

急に、岩井先生のトーンが落ちて、私とちかは間抜けな反応をしてしまった。

「先生?」

「どういうことですか?」

「まだ皆には黙ってるんだけど、この前、彼と離婚したの」

「なっ、どうして?」

「まだ数ヶ月しか経ってないじゃん」

「お互い、価値観が違ったの。女は働くな、って。でも私はそうはいかないのよ。」

「そんなことがあるんだ」

「10年以上付き合って、結婚生活はたったの4ヶ月。結婚して気付くこともたくさんあるのよ?」

「でも、先生はそれでいいんですか?」

「まあ、仕方ないんじゃないかなあ。人間だもん。感情はあるんだから。やっぱり前に進んでいかなきゃ、これからも大変だと思うよ?忘れられないからって、立ち止まってたら一生苦しいよ?」

私は、話をしている岩井先生の唇が震えているのに気が付いた。
多分ちかも感じていると思う。

きつと、岩井先生も辛いんだ。

岩井先生は、『皆になんて言おう………あんなに祝ってくれたのに』
とつぶやきながら、必死に涙を堪えているように見えた。

私は、なんて弱いんだろう。

なぜ岩井先生は、そんなに強く生きられるのだろう。辛いのは同じ
はずなのに。

大好きな人が自分のそばから離れて、どうしてすぐに忘れることが
出来るのだろう。

私は……愛す
る人、暎治を忘れなければいけないのだろうか

24話：最後

修学旅行は最終日を迎え、とうとう日本へ帰るときが来てしまった。いろんな意味で思い出に残った修学旅行だった。でも、もう一生思い出したくないものである。

「今から飛行機乗る時間まで自由ね！」

遠くから聞こえてくるような先生の解散の合図。みんなは仲の良い友達と一斉に動きだす。

私は未だにちかと距離を置いていたため、ちかは違う友達とどこかへ行ってしまった。

1人空港の中を歩く。
世界が広く見えて、怖い。

その恐怖に耐えきれず、壁の隅っこでうずくまっていた。
ただ時間だけが流れていく。

私はふと顔を上げた。

その目の先には、私の方へ近付いてくる佐原の姿があった。

「与瀬………昨日は」

「ここで話すのやめない？目立つ」
「あ、悪い」

私たちは人目のつかないようなカフェの奥の席に向かいあった。

「昨日のことなら気にしないで。特になんとも思っていないから」
「でも与瀬は――」

「ホントに大丈夫だから」

「そっか」

「それより、ごめんね。あんた、勇気出して私に気持ち伝えにきたのに、あんなことになっちゃって」

「いや、俺もよく考えたら、悪いタイミングで言っちゃったなあって」

「うん」

「でもな、稲山はお前のことが本当に大好き――」

「“だつた”んでしょ！！！！」

私は佐原の言葉を遮り、机を叩いて怒鳴った。

「今更過去形の告白なんていらない！私が辛いだけ！あいつは、ただ私を道具としか見ていない！」

「そんなこと……」

「だって、そうでしょ？俺がお前を守っていく、って言ってくれたときは、私は信じたよ。でも、今こういう状況になったのは飽きた証拠！私の弱みを握って一時的な自分の玩具にしたらだけ！」

「あいつは！お前のことを誰にも渡さない、って。それだけお前が

好きだったんだ」

「もしそうだとしても、それはあくまでも一時的なものにすぎない。あいつは、飽きたらすぐに捨てていく最低な男だよ！」

「あいつがお前と別れたのは、お前が成長してほしいからだ、って」「それがおかしいんだって！現にあいつは、他の子に心変わりしてるじゃん。私のところに戻る気なんてさらさらない。その別れた理由は単なる綺麗ごとにはすぎない。自分だけの幸せのためにね！」

「それは……………」

「さぞ、幸せなことでしょうね」

私は席を離れた。

もう、これ以上あいつのことを想いたくない。

でも、体は正直で、本当は暎治が愛しくて、その思いはやがて瞳の奥から込み上げてくる。

そんな気持ちの中、私は日本行きの飛行機に乗り込んだ。

*

修学旅行から早1カ月。

周りは、明日の予餞会（3年生を送る会）の準備でバタバタしていた。

私もその1人。

面倒なことに、演劇部の発表もある。
そのリハーサルのため、近くの会館に来ている。

明日の予餞会のあとは、暎治と岡野と佐原と会うことになっている。

結局忘れられず、みんなを誘ってしまった。

当然ながら、暎治はその誘いを断った。

だが、岡野が必死に説得してくれたために、暎治を誘うことに成功した。

みんなで集まれば、なにかが変わると思った。

花火大会のときのように……………

それに、もうひとつは、岡野君。

岡野なら、きっと暎治を説得してくれる、と期待していたからだ。

いや、決して岡野を利用しようなんて思っていない。力が必要だった。

最近は、岡野と行動することが多くなった。

岡野は、いつでも私の話を聞いてくれた。

岡野は、優しい。だけど鈍感。

修学旅行のときは、裏切ったのではなく、気を遣っただけだったら

しい。

岡野の鈍感っぷりには、どこか傷つけられる。

でもきつと、岡野なら、私の味方についてくれて、暎治とも話をつけてくれる。

私はそれを願った。

これが、最後のチャンスなのだから……………

*

予餞会終了。

私は片付けを終え、駅近くのカラオケを目指して走っていた。

佐原と稲山は、部活があるため遅れてからの合流だ。

私は、待ち合わせしている岡野と合流。

先にルームに入ることが出来た。

しばらく歌ったあと、ようやく暎治が来た。
暎治は相変わらず私に相手してくれない。

残り30分のところで佐原が来た。

だが、今わいわいする雰囲気はない。

「俺らはなにも聞かない。2人だけで話しつけない」

そういつてiPodを聞き出したのは、岡野だった。

便乗して佐原もイヤホンを耳にかけた。

そして2人は後ろを向いた。そこにあるのは、暎治と私の2人だけの空間。

不安に負けてしまいそうだった。

怖くなった。

「で、なに？」

長い沈黙の末、暎治は嫌そうに私に声をかける。

もうそこには、以前恋人だったという面影すらも残っていない。

「暎治、私と付き合う前、私をずっと守るって言ったのは、暎治だよ？」

「そうやって、過去の話を持ち出すのやめてくれない？」

「なに？今更撤回しろっていうの？今更後悔してるの？」

「それは」

「不安だっただよ！私は、こうやって暎治に捨てられることが！だからこそ、暎治の言葉が一番の支えだったんだよ。所詮はただの遊びだったの？自分の彼女が出来るまでの一時的な代わりだったの？同情の愛なんていらない！」

「違っって……………」

「私は、こんなにも暎治が好きなのに……………暎治の言葉を信じてたのに」

「……………」

「暎治は、今幸せ？」

暎治はコクリとうなずいた。

「私、よりも……………」

暎治は、同じように縦に首をふった。

「戻ってきてよ……………」

暎治は、その言葉には縦に首をふらなかった。

「暎治……………」

「時間だ。帰る」

暎治は佐原を引っ張って部屋を出ていった。
1人残ってしまった感覚になる。

「俺らも行きましょうか」

そう言って部屋の片付けをする岡野。

「自分の言葉に……………責任持つてよ」

未だ、ショックにひたっている私は、ギョツと拳を握った。
体が小刻みに震えている。

私は、岡野と一緒に、駅の近くを歩く。

私はうつむいたまま、顔をあげることが出来ない。

私は、人気のない道で足を止めた。

「どうした？」

岡野は静かに声をかける。

「終わったんだね……………」

私は、そう言つて岡野に体をあずける。

岡野はそつと受け止めた。

今誰かの支えがないと、倒れてしまいそうだった。

悔しくて、痛かった

そんな私を岡野はそつと抱き締めた。

「泣きたいんだろ？ だったら、泣け」

久々のこの温かい感覚。

でも、なにかが違う。

私と一緒にいるべき人は、岡野じゃない。

だが、不思議と私の鼓動は高鳴る。

トクン、トクン……と。

私はしばらくその不思議な感覚に溺れた。

「ごめん。俺、お前を幸せにするつもりが………こんなにもお前を苦しめることになるなんて」

敢えて返事はしなかった

私は夜の空を見上げた。

もう、終わったんだ………

そう思いながらあふれでた一滴の雫は私の頬を伝った。

25話：確かなこと

今日は休日である。

だが、家にいても落ち着かなかった。

私は、私服から制服に着替え、荷物をまとめた。

「あら、いつき。今日学校だったっけ？」

母が不思議そうに私に尋ねる。

「ううん。ちょっと学校で勉強してくる」

私は家を出た。

《今日図書室で勉強するけど、よかったら岡野君もどう？》

なんだか、最近の私はおかしい。

まだ、暎治を愛しているはずなのに、岡野ばかり意識してしまう。

前から頼りになる人だった。

暎治と私が付き合っているときも、全力で応援してくれて、後ろからサポートしてくれた。

私の背中をいつも押してくれた。

悩んでいる時は、恋人であった暎治よりも早く気付いて、駆け付けて

くれた。

どんな時でも私の味方で、一度も私を見捨てたことなどなかった。

彼は、彼なりに一生懸命私の幸せを考えていた。

今思えば、いつでも岡野の支えがあった。

いつのまにか、岡野を頼っていたり………

暎治と別れてから知る、岡野の存在。

もし、あのまま別れていなかったら、私が暎治を忘れなかったら、一生岡野の存在に気付かなかった。

気付かないうちにその思いが大きくなって………

………

だからこそ、余計岡野に頼りたくなった。

この人は、私のそばから離れないような気がしたから………

………

*

お昼頃

部活ジャージに身を包んだ岡野がやってきた。

「よっ！悪い、待たせた」

無愛想な暎治とは反対に、いつも笑顔で接してくれる岡野。

それにいつも励まされていたのかもしれない。

安心するんだ……………居心地が良いんだ。

「奥、行こうか」

図書室の奥はほとんど人がいないということを、2人は知っている。私たちは、静かに図書室の奥へと向かった。

案の定、そこは静かで人はいない。

「さっ、勉強するか」

岡野は鞆から、教科書を出す。

正直、私は勉強なんてどうでもいい。

今は岡野にそばにいてほしいから……………

「与瀬？どうした？」

ポツーとしてる私の顔を覗き込む岡野。

私は、理性を失った。

私は、岡野に抱きついた。

岡野は驚いた様子を見せたが、すぐにクスリと笑って私を抱きしめた。

「岡野君……………」

「ん？」

「離れたりしない？」

「うん。俺は、与瀬を見捨てたりしないよ」

「岡野君……………」

「なに？」

「ずっと、そばにいてくれる？」

「えっ…………それは、どういう……………」

「ずっとそばにいてほしいの……………私は、岡野君が、好きだから……………」

岡野は無口の中、考えこんでしまった。

やっぱり嫌なのだろう。

岡野からすれば、いや、誰からも私は軽い女だと思われる。

あんなだけ、暎治を愛してるがために、必死になりながら暎治を追いかけていたくせに、コロッと岡野の方に転がるなんて、と……………

.....

でも、私は真剣だった。
支えが必要だった。

今、私のそばですつと守ってくれるのは、岡野しかいないと思った。

少しだったが、出会ってからすぐに岡野に惹かれた。

だがそれは、幻にすぎず、暎治によって消されてしまった。

だがそれは、大事なものを失ってから、再び大きくなって現れ、それは一生大事にしていかなくてはいけないものだった。

私の裏で、知らない間に、本物の愛が芽生えていたのだ。

だが岡野はいまだに答えを出さずに無口のまま。
そして、ついには

「ごめん、ちょっと考えさせて」

と、席をはずしてしまった。

岡野が行ってしまったあとに流れる空気の音。

私は、今までにない恐怖を感じた。

「私ったら、なにしてるんだろ.....なんてことしたんだろ.....」

私は小さくなって、泣いた。
1人が怖い。

私は、筆箱からカッターを取り出した。

楽になりたい。

私は、自分の肌に刃を置いた。

「与瀬！なにやってんだ！！」

ちょうど戻った岡野は、その一部始終を見て、すぐさま私の手からカッターを取り上げた。

「岡野君……………私……」

「もうなにもいうな。それより、すまない。さっきの話だけど……………」

私は息を飲んだ。

もうフラれることは覚悟していた。
だが、フラれたその瞬間から私は再び孤独の道を歩むのだ。

「俺も、与瀬のこと、ずっと好きだった」

そういつて、岡野は私を強く抱き締めた。

岡野からは、石鹸のいい香りがする。

私にはたまらなく居心地がよかった。

「与瀬には、辛い思いがあるから、無理矢理俺のこと信じてなんて言わない。でも、俺は、稲山なんかとは違う。信じてほしい。俺は、いつも与瀬の幸せが一番だから……………」

その言葉は、私にとって、ものすごい励みになった。

私自身も、岡野自身も確かな方向に進んでいる気がした。

こうして、私と岡野が交際をスタートさせた2月26日。

私にはまだ、暎治を完全に忘れるという試練があった。

すごく過酷だった。

途中で嫌になって泣き出してしまったこともあった。

やっぱり暎治が好きだ、と言って岡野から距離をおいてしまったり。

でも岡野は、私がどんな姿、気持ちになろうとも、自分の心身を犠

牲にしてまで私を受け入れ、支えてくれた。

岡野には、迷惑かけてしまって、その罪悪感によって自分で自分を傷つけた。

そのことについて、もっと詳しく話していつてみよう。

26話：大切なもの

岡野との交際が始まって、翌日。

今日は雨。

私にとってはかなり憂鬱である。

そんな中、私の携帯が光っていることに気がつく。

《今日雨でチャリ出せないから、一緒に歩いていきませんか？》

岡野からだ。

私はフツと口元が緩む。

「行つてきまーす」

私は自分の傘を持って勢いよく飛び出した。

*

岡野とは、いつも通りな感じで、やがて学校に到着した。

教室についてからも、決して岡野から離れなかった。

なにかをごまかすように私は最高の笑顔を作って岡野とおしゃべりした。

だが、人間の心は弱い

なぜなら、私は暎治の姿を見た瞬間、今までにない悲しさや寂しさ
があふれてきたからだ。

この頃は、私は暎治へ他の男との仲を見せ付けて嫉妬をやいてほし
いというのが正直だった。

少しずつ岡野へ傾いてるとはいえ、やはり中途半端な気持ちで付き
合うのも、私のなにかが許さなかった。

暎治の笑う顔。

優しいところ。

全てがいとおしかった。

そんな暎治は、もういない。

姿を見る度に苦しくなる私の心。

もう傷だらけだった。

気になる女の子には体をくつつける。

それ以外にも、暎治の行動には特徴があった。

気になる女の子の私物を取り上げること。

そう、私のときもそうだった。

暎治から最初のアプローチ。

ホント、暎治はわかりやすいんだから。

その光景を見る度に悲しくなって寂しくなる。

同時に怒りも込み上げてきた。

暎治には、他の彼女がいるというのに、彼女が見ていないときには、他の女の子に手を出すなんて……………

とことん最低な男だと思う。

一度でも、1人の女の子を愛したことがあったのか。

こんな人を、私はなぜ愛さなければならぬのか。

『あきらめ』との格闘は、いつ終わるのか。

私はただただ泣くことしか出来なかった。

*

岡野との交際スタートから3日が経った。

ついに、私はその思いを打ち明けた。

「私は、やっぱり映治が好きなんだよ。こんな中途半端な気持ちで付き合って、岡野君を傷つけたくない」

岡野に怒られることを覚悟した。
捨てられることを覚悟した。

でも、岡野はなにも言わず私を抱いた。

「いいよ。俺は待つてるから。自分で決めな?」

「岡野君……………」

「俺は、お前を捨てたりしない。俺に出来ることがあるなら、いつでもいいから相談するんだ。1人で抱え込むなよ。な?」

その瞬間、私のなにかが変わった気がした。

私を見捨て、心変わりの激しい最低な男との復縁を求めるか。

私の過去を受け入れ、いつでも離れず、私の幸せを考えてくれる人と一緒にいるか。

でも、正直どっちも怖い。

暎治の方に行けば、自らの首を締めることになり、今以上の傷を負うことになるかもしれない。

岡野の方に行けば、暎治と同じように口だけの奴で、また同じように捨てられるのではないかと思ってしまうのだ。

だが、今の段階で私の味方、支えになっているのは……………
……………岡野だ。

少し、彼に託してみようと思った。

私は決めた。

岡野のそばにしよう。と……………

岡野で最後にしよう。と……………

「岡野君……………」

「ん？」

「拒否らないで」

そういつて私は、岡野の唇に口付けた。
私のキスは、『信頼』の証。

不安定ではあるが、ゆつくりと、だが確実に、岡野の方へ傾いているのが自分でもわかった。

岡野は、驚いた様子を見せたがやがて彼はクスクスと笑った。

私は、恥ずかしさや焦りで走ってその場から立ち去った。

岡野のファーストキスを奪ってしまったのだから、そりゃ、自分のやってしまったことは大変なことだ。

でも、私にとって岡野はもう離してはいけない大切な人。

もう迷わない。

彼が、私を愛してくれている限り私はそれに応えよう。

それが、未来も、一生続くものなら私は岡野と生涯一緒に歩き続けたい。

自分でも意外な結末に驚いている。

だけど、辛い壁を乗り越えたからこそ、本当の幸せを見つけたのかもしれない。

ある意味暎治には感謝している。

暎治との付き合いから、岡野という素晴らしいものに巡りあったのだから。

最終話：『愛してる』の台詞コトバ

それから4ヶ月が過ぎた。

あつという間の出来事のように思える。

今の私は……………とても幸せに満ちている。

「苳夜！」

岡野苳夜。

その存在があるからこそ、私は本当の愛を手にいれたんだから。

「いつき、なんだよ。ちょ、こら！服の中に手を入れるな！」

「だつてえ〜」

苳夜と一緒に過ごすことは次第に増えていった。

だが、その一方で……………

みんなの私を見る目が変わった。

彼氏が3人目だからか。

軽くて最低な女だと思われてるのか。

移動教室の授業で、移動しているときには、通る人通る人には、冷

たい視線を送られたり、私に近付くのを嫌がられたり、笑われた。

そんな毎日が辛くて、冬夜の見えないところでこっそり泣いた。

他のみんなが私の事情など知るわけがない。

だから、軽い女だと思われるのは仕方ない。

だけど、なにも知らないくせに他人のことをああだこうだ言われたくない。

学校に行く毎日が辛くなった。

暎治に関しては、すっかり私と付き合っていたことはなかったことにされ、毎日ヘラヘラと過ごしている。

そんな暎治を、次第に恨むようになった。

さらに、私の近くにいた友達も、私の友達の彼氏によって関係が引き裂かれた。

一番の幸せは手に入れた。

だが、失うものが多すぎる。

そのせいで、そんな幸せもだんだん失われていく気がしてたまらない。

それから、冬夜が私から離れていく夢を何度も見た。
その度に泣いた。

不安で私が壊れてしまいそうで、余計恐怖が襲う。

だが、その不安を消してくれるのはやはり、苳夜であった。

時に、その感情は爆発して苳夜に泣きながら八つ当たりした。

だが苳夜は怒らず、優しくそれを受け止めてくれた。

大丈夫、俺は消えたりなんかしないよ、と言って私を抱いた。

その度に救われていた。

次第に深い関係になっていき、愛を確かめあってはよりその絆は強くなる。

*

私は、2人並んで廊下を歩いていた。

しかし、周りの目は温かくはなかった。

少し距離を離して歩いた。

すると、前から、暎治の友達の子がバスケット部が集団でやって来た。

暎治の友達みんな敵。

私はそいつらにガンを飛ばした。

すると、そいつらも私を睨みかえした。

私は目をそらすと、そいつらは一斉に笑いだした。

「ヒューヒュー」

「フーツ。暑いねえ」

「稲山の元カノ！」

私は拳を握り締めた。

もう限界だった。

我慢していたものが一気に溢れて私の頬を伝った。

私は、教室についてから、思いつき机を蹴った。

悔しかった。

悔しくてたまらなかった。

仕返しが出来ないという自分の心の弱さに腹が立った。

そんな私を苳夜は私の頭を撫でて励ましてくれた。

だが完全に壊れていた私は、後で大変なことを口にして苳夜を傷つけてしまった。

*

「苳夜……………私なんかと付き合ったら、あんたまで笑い者になるよ」

「別にそんなのどうでもいいよ」

「どうしてもよくないよ。……………全部稲山のせいだ。私の気持ちなんにも考えずに自分の好き勝手に生活して、こんなにも苦しいのに……………」

「……………」

「もう辛いよ。あんな心が汚れた人たちの中になんか、学校になんか、行きたくないよ！」

「……はあ、なら来なくていいんじゃないの？」

「苳夜……………」

「しょうもねえこと言ってるじゃねえよ……………！」

苳夜の目付きが変わった。

私は、殴られる恐怖に小刻みに震えていたが、泣き出しそうになるのを我慢して苳夜の話を聞いていた。

「お前から見れば、俺は赤の他人だよ。……………だけど、俺ら、恋人同士だろ？いつきが辛い時も悲しい時も、俺はそれを全力で受け止める義務がある」

「苳夜……………」

「俺が、お前を守る。そう決めたから、もっと頼ってくれたっていいんだよ？」

そう言っつて苳夜は私の頭を撫でて自分の方を引き寄せた。

苳夜からは相変わらず甘い匂いが漂う。

私を叱ってくれたのは、苳夜が初めてだった。

でも、そこにも彼の優しさがあって、冬夜の隣は一番安心できる私だけのポジション。

私と彼は見つめあった。

「愛してるよ」

冬夜は私の耳元で愛の告白をする。

相変わらず、私は、「愛してる」という言葉に不信任を持っていた。

なぜなら、「愛してる」というその言葉には

『永遠』という意味を持っているから。

とても深い意味を持っていると思う。

一回その言葉を発してしまったら、『永遠』ということに置き換えられる、と私は思う。

だから人は、「愛してる」という言葉に甘え、それが壊されれば、大きな傷へと変わる。

恋愛は簡単じゃない。

そう簡単には本物の愛になんて出会わない。

私たちは若者であるから、恋愛をすることがカッコいいと思い込んで、恋愛の本当の意味を考えない。

私は、みんなよりそれを早くわかったから、得をしたと思う。

「いつき?どうした?」

「ううん、なんでもない。……………ねえ、苺夜?」

「ん?なに?」

「ずっと、……………ずっとそばにいてくれる?」

「なにを今更。俺は一生お前を思い続けるよ」

「苺夜……………愛してるよ」

「俺も、愛してるよ」

そう言って私たちは、深い深いキスを、何度も何度も交わした。

*
E
N
D
*

最終話：『愛してる』の台詞コトバ（後書き）

*

いかがでしたでしょうか。

私は波乱万丈な毎日を繰り広げているわけですが、今は落ち着いてます。

荃夜が支えてくれるのおかげで私は今を精一杯生きることが出来ます。

彼には本当に感謝してます。

暎治くんの方なのですが………特に言う
ことはないでしょう。

彼のような性格の人はたくさんいるでしょうし、（男女関係なく）
もう私のような出来事を体験してる人もいるでしょう。

もうそれはそれで受け止めてあげるしかないのです。

自分がやっている、もしくは、やってしまったことを本人が自覚を

持って意識しないかぎりとめることは不可能です。

傷ついたからといって、決してへこたれてはいけません。

むしろ、人生において一步人より前に出たとおもいましょう。

損をした分だけ、喜びや幸せって現れると思うんです。

それと同時に、

今までは「リア充爆発しろ！」と吠えてた私ですが、この出来事を通して考えが変わりました。

私のように真剣に恋愛している人にはすごく申し訳ないことをした。と思っています。

冬夜とは永遠の愛を誓いました。

これからもいろいろな壁にぶち当たることはあると思いますが、その度に取り越えて成長していきたいと思っています。

なので、どうか私たちのこれからを温かい目で見守っていただけると嬉しいです。

では、またどこかでお会いしましょう。

ありがとうございました！

*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8706v/>

* “愛してる”の台詞*

2011年8月30日18時12分発行